

れるのだせ。お前は鹹水浴をやつてゐるさうで、私もほんとに安心した。それはお前にはきつとよくきくだらうと、私は考へてゐるよ。たつた今使が来て、ポツツダムへ行かねばならないんだが、あまり氣もすゝまず、あやふやな返事をしておいたのさ。さよなら、私のかはい、者よ。この消印の手紙がきつと、お前がお前のいひなづけの男（この語は私は大嫌ひなんだ）からもらふ最後のそれとなるだらうよ。今日シェーンハウゼンではじめて私たちの婚約が告示された。すばらしいことぢやないか。お前の幾つかの呼名を私はしかしよくおぼえてゐなかつたので、ヨハンナ・エレオノーレだけを申しのべただけなのさ。ほかの六つはそのうちよく教はるとしよう。さよなら、私の最愛の者よ。御兩親様へくれぐれもよろしく。お前の最も忠實なる

B.

四五、舅姑へ

親愛なる御兩親様

ザルツブルクにて、一八四七、八、二五（或は二六）

ヨハンナがシャーフベルク以來の疲勞で私がぼんやり眠つてゐる間に私たちの體験についての詳細な報告をやつたやうですから、私はたゞ御無沙汰お詫びだけしておかうと存じます。さうしないと、ヨハンナが手紙を書いてゐたときだけではなく、今もなほ眠つてゐるとお考へになるかもしれませんからね。私たちに旅行はひかへよと書いてよこされた、母上様の御親切な御趣旨に従はなかつたのは、結果からいふとかへつてよかつたと思ふのです。と申すのは、方々を見物する私自身のよろこび、ヨハンナの有頂天のよろこびを見る私のよろこびはいふまでもないことですが、爽快な山氣にふれることによつて、さらにシャーフベルクの登山——それでもつて私の筋肉はまだ痛んでをりますが、ヨハンナの方は私より早くその疲勞から回復したんですよ——のやうな強度の肉體的の努力のために、彼女の健康と快活さは日に増し強められて来たからです。旅費の點については、母上様、あなたをいくらか安心させてあげるために、今までどのくらゐか、つたかを正確に申上げておきませう。旅に出てからもう十五日になり、今日は第十六日目に當りますが、今まで、百七十七ライヒスターラー、或

は三十フリードリッヒスドル(一フリードリッヒスドルは約十七マルク)を支出しました。もつともある地方では大分高くかかりました。ヴィーンやリンツがさうですし、蒸気船も相當かかりました。私たちはこれからまだ二三週間は旅にゐること、思ひますが、これまでの割合で行きますと、費用は四百ライヒスターラーを大して越すことはなさうですし、そのくらゐで大いに生を楽しむことができるわけなんです。ヨハンナは只今も私の書く手紙をのぞき込んでをりまして、私が私の母たるあなたを「ドゥー」(親愛の)と呼びかけたのをみて、驚きとよろこびでをどり廻つてをります。しかし、何も別に驚くことなんかありやしないぢやないですか。彼女は好物のプラムや梨や山桃が食べられさうなので、やつと氣をしづめました。さういふ果實でもつて彼女の胃は日に増しよくなつて行くやうです。葡萄もこれまで大分食べられました。天氣は昨日以來曇つてをりますので、もうこゝに滞留しないで早速ミラノやゲノアの方へ行つて、そこで大いに眼を楽しませるつもりです。山の中では見るものとは何もありませんからね。これから私たちはカプチナー山に登つてみようと思つてゐます。御手紙くだされる場

合にはティロールのメランの方へおよこし下さい。そこに廻送の指定を書き残しておきますから。さよなら、御兩親様。あなた方の忠實なる息子ビスマルクより。

四六、兄へ

親愛なる兄上

ヴィチエンツァにて、一八四七、九、一〇

私の運命についてあなたを不安におちいらしめないために、私もヨハンナもすこぶる元気で、昨日ヴェネチアを立つて、今日、九月十日は、こゝヴィチエンツァにゐるが、今日當地發、ヴェローナを通つて、ミラノ、ジュネーヴ、バーゼル、フランクフルト、それからシェーンハウゼンへ行かうとしてゐることを、あなたにお知らせしておきます。インスブルックから出した手紙は……もうつききましたでせうか。メランではフリッツ(フリードリッヒ・フォン)とローン(アルブレヒト・フォン)とに會ひましたが、兩人ともヴェネチアへ行くやうに私たちを説きふせたのです。何しろアルペン地方の天氣があまりひ

どかつたものですから。そこで私たちは國王陛下(プロイセン王、フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世)に拜謁はいごついたしました。陛下にはおそれ多くも私たちを食卓へお招きくださったのです。市まち（ウエ）は期待以上に立派でした。フリッツも昨日トリエストの方へ出發したが、春には親王附部隊から他へ轉じる模様ですよ。當地には恐ろしく澤山のオーストリアの軍隊が駐屯ちゆうとんしてゐるが、續々とあとからやつて來るやうです。さよなら。皆さんへよろしく。あなたの忠實なる弟

B.

四七、妹へ

シエーンハウゼンにて、一八四七、一〇、二四

親愛なるマルレよ

私たちの交通は久しくとだえてゐたが、それはけだし當然なことではなかつたらうか。私はもう四番目のペン(鴛)で書いてゐるんだよ、どれもこれも役に立たなくなつたのでね。何しろ、いひなづけの男だの、旅客だのといふものは手紙を書く暇がない

のが當りまへだからね。私たちの旅は少々追ひかけられてゐるやうなもんだつたが、それでもずるぶん愉快だつたよ——とりわけ、これまでハルツ山とカールスバートから先へは行つたことのないヨハンナの、ちつとも世間ずれのしてゐない氣持のためさ。私なんかになると、いろ／＼新しい景色をみて感心したくなるやうな時代がもう過ぎちやつたと見えて、むしろヨハンナのよろこぶ顔をみてうれしく思つたやうなわけなんだ。私たちは初めはメランまでゞ引き返さうと思つたが、たゞ、旅費がそれまであまりかゝらなかつたので、上部イタリアまでのすことになつたのさ。スイスとライン河はあわたゞしい歸り路に通過しただけ——バイエルンを通るのは退屈な旅なので、廻り路をしたわけだ。旅費はあまりかゝらなかつたものゝ、それでも私が用心に持つて行つたヨハンナの銀貨の資金は旅行用資金の方へ投げ込まねばならなかつたし、さしあつてお父さまからもらつて來た鍍金めつきの燭臺しよくたいと湯わかして我慢してゐるやうなわけなんだ。それにしてもすつかりの旅の費用は私をはじめ見積つたよりすつと安くあがつて、大體八百ターラーぐらゐですんだのさ。ほかにヨハンナが少くとも五

十ターラーぐらゐな買物はしたかね。……とにかく結婚してからといふもの、私は非常に幸福にくらしてゐるし、わが家にひとりであつた以前には私を惱まし通してあつたところの、底のしれない退屈と意氣銷沈せうちんからすつかりはなれてしまつたよ。お前がアントニーアントニー(アトケンブルク)のためにオスカールに同行できなくなつてしまつたのは、残念だつたね。……ヨハンナは毎日いろんな物をひつかき廻し、ひつくりかへして大いに生を楽しんでゐる。ベリン(前出)の細君はヨハンナに、麻布の天使はもうあなたに乗りうつ、たが(ヨハンナが麻布の着物、下着類が好)食堂天使(食堂悪魔とは言へなかつた)のだらう)があなたに乗りうつ、たら(料理がうま)今の倍もちやんとした奥様になれませうに、といふ讃辭さんじを呈したくらゐさ。……

お前の忠實なる兄 B.

四八、妻へ*

ヨハンナヒエンよ！ 私は昨日九時までラートチヴィル(ヴィルヘルム・フォン)の許もとに、十一時

ベルリンにて、一八四八、一、一〇、月曜日、朝

までカールスベルク(市の人。伯爵テオドル・フォン)の許もとに、十二時までマルヴィーネの許もとにゐた。……水曜日の正午に馬車をよこすやうにしておくれ。たゞし家へつくのは多分夕方にならう。國王陛下の許へ私の親類どもと一しよに伺候することは、熟考の結果、取止めとした。騎士團祭きしだんさいももう目前に迫つてゐるのでね。これからまだ新聞に關する二つの會議をひかへてゐる。だからそれをすまさないと歸れないわけさ。ベッブス(ベルンハルト・フォ)からお前たちへよろしく。私より母上へよろしく。さよなら。

* 妻としてのヨハンナに與へた最初の手紙。

四九、妻へ

一八四八、四、二、日曜日、夕

私の愛する者よ

今は聯邦議會の議員は全く安全であることを報告することによつて、お前を十分安心させることができるわけだ。議會は今日開會された。たゞし國王陛下の臨御なく、

したがつて『萬歳』の聲もおこらなかつた。陛下に對して感謝を捧げようとの決議に、私は數言でもつて抗議(王威の維持のために)を述べたが、別に敵意的反對もきかれなかつたよ。一萬人の市民兵が私たちの護衛のために配備されたが、しかし王城のほとりでは騒ぎなどは少しもおこらなかつた。明日は會議がないので、お前のそばへ行くことができらう。全體の議事はもう今週中に、多分木曜日にはもう終結する見込みなので、御儉約の結果、馬車をやとふことをやめにしたんだよ。……母上様によろしく。元氣でゐておくれ。私は以前よりずつと氣分がおちついて來たよ。……お前の忠實なる

B.

* 三月革命のために、ドイツは國內不穩の状態にあつた。

五〇、妻へ

一八四八、四、三

私のいとしい者よ、私が昨日の晩書いた手紙はちよつとした手ちがひのために郵便

局へ持つて行くのがたいへん遅れたので、今日はお前のところへ着かないで、明日になつてやつとこの手紙と一しよに着くんぢやないかと心配してゐるよ。お前が郵便の到着時刻にすゐぶんがつかりして、今夜(九時)私のことをあれやこれやと考へて不安な氣持になつてやあしなないかと思ふと、私は心苦しくなつて來るよ。私は非常に退屈な一日を鋪石道ほせきだう通ひや喫煙や策略などですごしてしまつた。朝の九時にやむを得ない用事さへなかつたら、私はアンガームوندهへ行くとおぼつたがね。そちらへは今日手紙を出しておいた。……私の昨日の演説の趣意を批評してもらひたいね。たゞしベルリン新聞に掲載けいさいされてゐる演説記事によつちやいけない。私は演説の速記録をお前のところへ持つて行かうと思つてゐるよ。別に特に面白いもんぢやないが、たゞ私があつかましくも朝三暮四てうぼの日和見議論ひわみをやる、一部の卑劣な官僚者流の仲間でないことを見てくれ、ばい、のさ。……いや、政治論なんか、お前にや退屈だらう。しかしいろ／＼な考へがつい口をもち出てくるんだね。しかし私は家を出たときよりもつと靜かな氣分でお前のところへ歸るだらうよ。私はまた人間らしく食事をするや

うになつたし、一週間前にはどうでもよかつたんだが、この間話した二千ライヒスタ
ーラーを手に入れることに對して、大いに利害關係を感じ出すやうになつたのさ。郵
便のつくたんびに一度や二度私の手紙がなくなつても、どうか心配しないでおくれ。こ
こで私たちに何らかの危害が與へられるなんて心配は少しもないよ。それにいろ／＼
の方面の私の友人が續々と私のところへ押しよせちや、政治上のことではいろ／＼入れ
智慧をしてくれるのだ。それだもんで四分の一枚ぐらゐの、マルレ(妹のマル)へやる手
紙なんかも、今朝の九時に書き出して、三時頃やつと書き終へたやうな始末なのさ。
私はヴェルデック(参事)のところへ愉快にかつ安く生活してゐる。たゞ家が少し中心
にはづれたところにあるので、舗石道を歩くのが少々苦になるのさ。母上様とベリン
夫妻へくれ／＼もよろしく。私は今オテル・ド・フランスの定食々卓で書いてゐる。
丁度サラダが少しばかり持ち運ばれたところさ。お前の最も忠實なる

B.

五一、舅へ

シェーンハウゼンにて、一八四八、八、二二、午後八時半

親愛なる父上様

たつた今あなたは、神の慈愛深いお助けでもつて、ヨハンナがひどい、しかし短時
間の苦痛の後に私に授けてくれました健康な、ちやんとした少女(長女マリー、後にク
ウ伯夫人)の御祖父様になられたのです。目下のところ、母子共にこの上もなく健康です。
ヨハンナはぐつたりと靜かに、しかしさわやかさうに、カーテンのかけでねてをりま
すし、小さな嬢やはさしあたりソファの上の毛布にくるまれてねてをりますが、と
きどき泣き出すのですよ。一番初めが娘であつたことは、私としてほんとにうれし
いのです。しかしたとへ一匹の猫が生れたにしても、私はヨハンナが身二つとなつてく
れた瞬間には、神様にひざまづ跪いて感謝したかもしれませぬ。何といつてお産といふもの
はひどいものですからね。私は昨夜ベルリンから歸つて來ましたが、私も彼女も今朝
はまだ、かういふことにならうといふことはちつとも感づかなかつたのです。午前の
十時に、葡萄の一房を食べてから、ヨハンナははげしい苦痛におそはれましたし、ど

うも様子が變なので、私は早速彼女をベットへ連れて行き、すぐさまタンガールミュンデの方へ使を走らせました。そこからやつて来るにはエルベ河を渡らなければならぬいのですが、やがて十二時過ぎにはドクトル・フリッケがやつて来てくれたのです。かん高い聲と一しよに私の娘が生れたのは八時でした。私はもう今日の正午にヒルデブランド(従僕)をベルリンへつかはしまして、看護婦のポルトを大急ぎで呼びよせることにしました。私は御両親様が旅行をお延ばしになつたりしないことを望みます。しかし母上様には旅に出て決して無理をされないやうにお願いいたします。母上様があまり自分の御健康のことなどをおかまひにならないといふことは、重々存じてをりますが、しかし母上様よ、あなたはヨハンナがあなたのことので氣をもんだりしないやうに、彼女のことをお考へになつただけでも、體をおいとひにならなければいけませんよ。フリッケは經驗もあり、注意もよく行きとゞいてゐて、氣受けがたいへんよろしいやうです。私は訪問を一切受けず、ベリン夫妻とドクトルと私とで一切を處理してゐます。フリッケは赤ん坊の重量を約九ポンドと査定さていしました。そんな風にこれまで

のところすべてが順調でして、それに對しては神様に感謝を捧げるのほかはございません。お出でくださる際にアンヒエン(アンナ・フォン・ブルーメンタ)をお連れくださったのなら、ヨハンナは非常によろこぶだらうと存じます。

二二、朝

萬事うまくいつてゐます。たゞ搖籃オウゴンがまだないので、ちつぽけなフロイラインはさしあたり飼料かひば箕の中にキャンプしてゐなければなりません。神様があなた方と私たちとお守りくださるやうに、御両親様よ！ 萬事、拜眉の上。

B.

ベルリン及びブレッデンティンを除いての、御地の方面、例へばゼーホーやゲンツなどへの御披露ごひろう、よろしくお願ひいたします。ヨハンナよりくれぐれもよろしく。彼女は娘の鼻が大きいといつて不平たらくです。私は普通以上に大きいとは考へないのですが。

五二、姑へ

親愛なる母上様

シェーンハウゼンにて、一八四八、八、二四

この手紙がまだラインフェルトにいらつしやるうちにお手許にとくかどうか、よくわかりませんが、まあ行き當りばつたり差上げることになります。何はともあれ、ヨハンナの容態はずつと良好であることを申し上げて、御安心あらんことを願ひいたすわけです。たゞ分娩の四五日前から咳をしてゐたのですが、それがまだとまりませんで、何分體をゆすりますので、とりわけ今朝など、少し惱まされたやうでございませす。赤ん坊さんはまるで屠殺されでもするかのやうにはえるのです。目をさまして、何か氣に入らないことでもあると、遠慮會釋もなく聲を張り上げるのです。榮養の方はまだどうもうまく行きませせん。やんちや坊主は、どうも親父から受けついただとは思はれないやうな片意地でもつて、役に立たない水蛭のやうにちつとも吸ひ込まうとしないのです。たゞ水蛭とちがつて坊主は自分の反感を聲に出してあらはすんですね。ポルトは今まであなたのお室に寝てをりました。私はまだカーテンのうしろに寝るこ

とにしてをります——せめて最初ときは彼女のそばにゐてやりたいからです。何しろ彼女は私に一番信頼してをりますし、私がまた大の心配やなんですから。かくて私はシラーのヨハネ騎士團の騎士(シラーの譚詩の大蛇との戦ひの主人公)のやうに、一日中事務机によつて政治上の計畫や鬭争に没頭するかと思へば、産褥のそばで看護人の役割をつとめてゐるのです。郵便時間が近づきました。御機嫌よろしう、御母上様。

あなたの忠實なる息子 B.

五三、妹へ

親愛なるマルレ

シェーンハウゼンにて、一八四八、八、二六

お前の御親切な手紙はヨハンナをたいへんよろこばした。ほんとにありがたう。彼女は大體いゝ方だ。たゞ咳を産褥へ持ち越したので、それで朝と晩に大分惱まされるのだよ。それに片意地な赤ん坊は、ずるぶん私たちはやきもきするんだがね、どうし

でも母親の乳を吸はうとしないのさ。子供を産んでから三月になる村のある女をたのんでみたが、やはりだめなんだね——たゞ一層はげしくはねつけるだけなのさ……早速手傳ひに来てくれるといふお前の志はありがたいが、どうにも困つて看護婦のほかに當地の婦人たちの誰彼にも来てもらつてゐるのでね、ヨハンナも今更お前をわづらはさないでい、と言つてゐるんだよ。さういふわけでお前が来てくれるなら、來週のしまひ頃、木曜日か、金曜日か、それとも土曜日ごろにしてくれと、私たちは一層うれしいんだがね。その時分にはヨハンナも少しは體の自由がきくやうにならうし、お前のお見舞ひをよろこんで受けることができるだらう。そのときにはお前はまた私のお姑さん——月曜日か火曜日には多分こちらへ來られるさうだが——の實際的といはうよりはむしろ敍情的な考へ方や動作に對して——さういふことがヨハンナをいくらか悩ますやうな場合に——氣轉をきかしてバランスを取つてくれること、思ふ。お前がもつと早く、火曜日か水曜日に来てくれるなら、そりやもちろんありがたいのだが、早く來たからといつて何も早く歸つてしまはれては困るのさ。何よりもさういふ

心配があるので、すぐに來てくれぬやうにお前に頼むわけなのさ。お前はこの遠出の旅行には一定の期日をきめてゐると、私は見當をつけてゐるのでね。オスカーも一しよに來てくれるなら、來てくれるだけでも、それに鷓鴣獵が一しよにやれるかもしれないので、私は大いにうれしいのだがね。私たちの方でも、彼に幾日もこゝで退屈な日を送らせるのは本意ぢやないから、ヨハンナの容態がもう心配がないとわかつたら、私は彼と一しよにベルリンへ歸つて、そこでまた政治のからくりくまに首くびを突つ込むこと、しようよ。……しかし人間も一旦家父になると、うるさいことだらけで、實際まゐつてしまふね。私の天性の中にひそんでゐるかんしやく玉は子供の泣聲や犬のなき聲や（父上が口癖のやうにおつしやつた）看護婦の「い、子ぢや、い、子ぢや」をきいてゐると、思はず破裂しさうになるんだ。お前が來てくれてお前一流の魔法まほうでそれをおさへつけてくれることを希望してゐるよ。……

オスカーにくれぐれもよろしく。お前の忠實なる兄

B.

ヨハンナからも千の、いや、1000Xの御挨拶を申上げる。

五四、妻へ

ベルリンにて、一八四九、三、二九(木曜日)

いとしいナンネよ。G^{ジー}を通しての、多分ゲルトナー(市會)一家を通してのお前の手紙受取つた。それを讀んで、私は神が私たちの嬢やを不幸(乳母がわるくて、子供の健康ななどを言つてゐる)に對してお守りくださるだらうといふ新しい希望をくみ出すことができたよ。私たちはやつと住家(すまか)をみつけた。それは次のやうな間取りなんだ。圖の1は階段、234は私たちが使ふのだし、階段からそれへ別々にはひれるやうになつてゐる。3は子供部屋になるわけで、10の方に出口があり、衣裳部屋へ通じてゐる。56789等にはアルニム一家が住むことになる。翼屋(はなれ)11も同様、そこには料理人や召使たちが住むことになるが、彼等は9を通して出入りするやうになつてゐる。アルニム一家は8を通して階段へ出たり、はひつたりするのだ。私たちはそんな風にきつぱりと分離(ばんり)されてをつて、別々の生活をする事ができるんだよ。4はお前の居間になる



が、それをお前はマルレが住んでゐる5から任意に遮断(しやだん)することもでき、或はそこ

結びつくこともできるのだ。2には私のための寢臺兼用ソファがはひるわけだが、お前は氣が向いたならお前のベットを2の私のあるところへおくこともできるし、或は大きな室3の、赤ん坊のところにもねむることもできる——お前の好きなやうに、毎日でもさうするがよい。8はアルニムの部屋、5はマルレの部屋、7は子供部屋、6は彼等の寢室。かういふ間取りはお前の望み通りのものぢやないかと、私は思つてゐる。ところがあいにく、こゝはお前の心配してゐた丁字形十字の住居でね、ヴィルヘルム通とペーレン通の突當りにあるんだがね、こりやまあ仕方がないよ。お前があまり進まないのは、マルレが間取りを取りきめたといふ點にあるんぢやないか

と思ふが、今度の取りきめは、私の仕事で、私もそれまでするには相當骨を折つただよ。そんなわけだから、お前もこのところあつさりと承知してくれてはどうかね？ 家賃一切で月に五十八ライヒスターラー(年に七百ターラー)かゝるんだが、それに家具費がいるわけだ。それは十五乃至十八ぐらゐのところ、まづ食費の約三分の一。これで私はあんまり高いとは考へてゐないんだがね。月曜日に引越してもいゝことになつてゐるが、アルニム一家はすぐにやつて来るやうだ。私たちは多分次の水曜日から向う一週間は復活祭の休暇を取ることになるであらうが、この一週間のこの新居ですごさうと、それともシェーンハウゼンでくらさうと、お前の自由にするがよからう。子供のことを考へると、シェーンハウゼンにゐる方がむしろよいかもしれないね。お母さまはどんなお考へだらうか？ とにかく私たちはお祝祭をお母さまと一しよにすごさうと思ふし、またさうしなければいけないよ。さうする方が神様の思召に一層かなふことになるからね。私たちは私たちの苦境を一しよに切りぬけて來たのだから、また神様に復活の日には、これまでに私たちをしてくださいつたことに對して一しよに

なつて感謝しようと思ふのだ。教會の關係からいふと、こちらですごす方がむしろよいかと思ふが、とにかくすべてお前たちの意志と神の思召おぼしめしにおまかせするよ。子供の健康といふこともその際大いに考へなければなるまい。政治のことは何にもお知らせしないよ。新聞をみればわかることだからね。……

私が三日もお前に手紙を書かなかつたことをゆるしておくれ、私のかはい、者よ。たまに閑暇ひまになると、訪問客が押しよせて來るのだ。メクレンブルクやシュレージェンやライン地方からの友達が入れかはり立ちかはりやつて來たので、すっかり疲れてしまつて、會議中もぐつすりやつちやつたのさ。ゲンティンで月曜日の朝、ウンルー(ハンス・ヴィクトル・フォン・ウンルー。プロイセン州の代議士)に出つくはしたよ。彼は今度も子供のことを一番先にたづねてくれたが、なか／＼思ひやりのある人物だ。私は危険はもう通り過ぎたと答へておいたが、その通りなんだらうね。どうか神様がかういふ方法で私の罪をお罰しにならないやうに、私が多分に負はなきやならない罪の報いをお前が背負ふことにならないうやうに、私は祈るばかりだ。お母さまにくれ／＼もよろしく。さよなら。ベビーの

ことをいろ／＼知らせておよこし。住宅がお前の氣に入らないと困るが、まあ氣をわるくしないでもらひたいよ。ほかを探してみたが、どれもよくないか、或はもう借りられてしまったのでね。お前の最も忠實なる

v. B.

五五、妻へ

ベルリンにて、一八四九、九、三

私のかはい、者よ、たつた今お前の手紙を受取つて非常にうれしかつた。それで軍部を誘惑しようとしてゐる一派の懲罰についての、退屈きはまる委員會のさ中でそれを讀んだのさ。末節にのみ拘泥する法律家と空虚な美辭麗句家とがよつてたかつて簡単な問題をいたづらにむづかしくしてしまふので、私の頭はそれについてゆくことができなくなり、ついお前のなつかしい手紙の言葉の方にひつぱられてしまふのだよ。まづ第一に、お前たちがみんな丈夫であてくれることは、何よりもうれしい。どうかお前も例のメランコリーで惱まされないうやうにしておくれよ。私たちがあのいやな五

月(一八四八年の革命につながらる議会の騒ぎをいふのだらう)以來いつも別れ／＼になつてゐるといふのは、私たち兩人にとつては辛いことだね。しかし月が變つて行けば、當地の狀勢もすつとあのまゝになつてゐることもないし、とりわけ十二月に對する心配(夫人は懷妊してゐるのである)などに心をうばはれたりしないやうにしておくれ。私たち十億の人間といふものはみんな女から生れたものであり、生きてゐる人の魂はいづれも一人の母の苦痛と危険との結果なんだ。その際不幸な出來事といふものはさうめつたにあるもんぢやない。さういふことがおこる場合にはいつもある怠慢とか、輕率とか、むろんお前にはない自然の缺陷とか、必ずつきまとつてゐるもので、周囲でもせい／＼お前を大事にしなくてはならないのだ。お前がすつとラインフェルトに滯留するといふのはいけないよ。そんな妻らしくない申出では私は斷乎として反對する。できるならば、私は月ぎめで借りられる家具つきの室を探さうよ。お前がシェーンハウゼンでお産をするやうになれば、どうもその方が今までのところではお前にとつてすつと都合がよいし、らくだらうと考へるからね。さうなつたらお前の體の工合が悪い間だけ、賜暇休暇をもらつて、その間シ

エーレンハウゼンに滞留してもかまはないのさ。もつとも私たちがそんなに長く一しよにゐられるかどうかは、今のところすこぶる疑問なんだがね。議會の解散が行はれることも不可能ぢやないんだ。この三月のやうにどんなことがもちやがるかわからないからね。……

私はこれから私の手紙に番號をつけることにして、この手紙を7としておくよ。お前もさうするがい。さうするとどれか一つなくなつてもわかるからね。このときれがちな手紙をゆるしておくれ。私はさつきからとき／＼法律家と爭論しなければならぬし、彼等の言ひぐさに半分ぐらゐ耳を傾けてゐなきやならないんでね。

アンヒエン(前出。アンナ・フォン・プルーメンター)が行つてしまふといふことは、ほんとに残念な話だ。彼女はお前のやうな性質の者にはなくてならない人なんだからね。彼女が行つてしまふと、お前がメランコリーにおちいる度數が多くなるであらう。お母さまはハンス(ハンス・フォン・クラー)あての手紙で、私がしげ／＼手紙を書いてよこさないと言をいつて來られた。しかしその非難は當つてゐないと思ふよ。私は相當勉強して、一週間に

少くとも二度、いやむしろ三度は書いてゐるんだ。今のところ私はまだ閑暇があるのさ。しかし會議が今よりももつと頻繁(ひんぱん)に行はれるやうになると、私のかはい、者よ、私は私の手紙が今より度數がへるとは思はないが、しかしもつと短くはなるかもしれない。朝から客の來るのは都合の悪いものだ。ところでハンスはそれに對する大きな磁石(じしやく)なんだ。大てい何かの請願者(せいぐわんしやく)、それも大てい婦人がやつて來て、何時間も私の衣服(ふく)の前(まへ)に坐つてゐるので、ズボンを出せないことが幾度もあるのさ。それによくまた用件にひつぱり込まれるんでね、さてやつと外出してしまふと、タウベン町の方面に戻つて來ることがなか／＼むづかしいのさ。何しろ晝食の引力でもつて外の方向へひきよせられるのでね。さうかうして夜の十一時か十二時になつてうちへ戻つて來て、床につく前に私のナンネに手紙を書かうと思つてゐると、ハンスがそこにあるんでね、けふの出來事を話し合つたり、クロイツ新聞を讀んだりして、あすの朝はきつと手紙を書くことにしようと思ひ決心をして寢につくんだが、さて朝になると十分寢きらないうちにもう退屈な同僚などがよくやつて來るつて始末さ。しかし私が少し怠

けたり、意地の悪い悪口やが何か言つたからといつて、手紙を書くのをひかへたりしないでおくれ。出来るだけ度々、それも長く書くやうにしておくれ。私はどんな報知しらせでもうれしいのさ。手紙が少し厚いと一層うれしいのさ。……多分私は近日中に、ベリン前出。シェーンハ（ウゼンの管理人）には見つからない書類を取りに、シェーンハウゼンへ出向かなきゃならない。私を愛するみなさんによろしく。神を信じて元氣でゐておくれ。お前の最も忠實なる

V. B.

五六、妻へ

ベルリンにて、一八四九、九、二八、金曜日

私の愛する者よ、家はペーレン町のにきめた。ティーアガルテンの方の家は、冬天气でも悪いと、お前の出はひりに都合が悪く思つてね。私はさしあたりミンナとしよに引越しをして、一つの室に家具を備へさせるつもり、ベットはマルレが貸してくれることになつてゐる。私は初めはシェーンハウゼンへ出向いて、お前がこゝへ來

るときには何もかも設備ができてゐるやうに、いろ／＼物を取りに行かうと思つたのさ。しかし、私はどうも忘れっぽいのでね、何でも氣がつく細君がゐないと困るんだよ。それに荷車は日に一ぺんしか行けないでね。だからどんな物が入用か、一つ表を書いて來てもらひたいね。さうでないとすると、子供をまづラウラのところへあづけて、お前にシェーンハウゼンへ出向いてもらひたいのさ。とにかくお前がこゝへ來る前に、萬事とゝのへておいて、お前はたゞこゝへ馬車でやつて來て、私の開いた腕ともう室へはひつてゐるソファとへ身を投げ出せばいゝといふ風にしておく方がいいと思ふ。さうなつたら、どんなにうれしいだらう。何でもいゝから早くおいで、私のいとしい天使よ。天氣は今日はもう非常に寒い。いつお前をツインマーハウゼンに迎へに行けるか、はつきりと書いておよこし。昨日の私の手紙を悪く取つちやいけない。私がお前のことを悪く取つたなど、考へちやいけない。しかし早く來ておくれ、急いでね。ハルツ山の方へは私は行かないことにした。御機嫌よう。とり急ぎ、お前の最も忠實なる

V. B.

青い山越して、

白い海の泡越して、

お歸り、いとしい人よ、

お前の寂しい家へ（古歌）

* この詩はイギリスの古い歌である。

五七、ベルリンの牧師ゴスナーへ

ベルリンにて、一八五〇、二、一一

謹啓

貴下を個人的に存じ上げてゐるといふ光榮をまだ持ちませんが、私たちが共通の友人を持つてゐる事情もありますので、私は貴下が私の長男（長男ヘルバートは一八四九年十二月二十八日に生れた）に洗禮を與へることをおこぼみにならないであらうといふ希望を申し上げたいのです、そ

して貴下が明後日、すなはち十三日の午前十一時半頃にこの神聖なる式をドロテア町三十七番地二階の私の住居においてお舉げくだされる時間をお持ちかどうか、拙宅まで御光來願へるかどうかをおうかゞひいたす次第です。幸ひにして御承諾くだされるやうでしたら、明日の午後もしくは夕景の御都合よろしき時間御指定くだされたく、その時間に參上して委細のことを御相談申上げたいと存じます。敬具。

下院代議士

フォン・ビスマルク || シェーンハウゼン

五八、妻へ

ベルリンにて、一八五一、一、七

この前のお前の手紙をもらつてからの、この四日といふもの、私のかはい、者よ、私は非常な不安のうちにくらしてゐるのだ。マリーちゃんほんとは猫紅熱なのか？ 彼女が生きてゐるなら、お前たちが丈夫なら、どうしてまた知らせが來ないのか？ こんな疑問のために私は寝つくこともできないし、寝てもまた目がさめるのだ。さう

すると結局私は、私のかはい、者よ、お前が看護疲れや徹夜のために病氣になつたんだと思ひ込まずにはゐられないのだよ。もしお前が病氣でないとしたら、子供が猖狂熱にかゝつてゐると私に知らせてよこして、それから四日間も何も書いて来ないといふやうな無慈悲なことはしないだらうに。毎朝私は郵便受入函へ行つてみたが、いつでもむだ足なのだ。お前自身が病氣なんだ、さうでないとしても非常に心配した結果どうしていゝかわからないやうになつてゐるとでも思ひ込まなければ、私としても立つ瀬がないのぢやないか。どんな悪い知らせでも、どうかすぐ知らせるやうにしておくれ。一旦誰かゞ病氣だといふ知らせが来ると、空想が日に／＼、刻々につのつて行つて、一番ひどい場合を考へ出すもんなのだ。お前が病氣なら、ほかの誰かゞ一行でもいゝから私に手紙を書いてよこすぐらゐな親切は持つてゐるはずだ。かういふ不確實な状態は私にや我慢ができないからね。この數日間といふもの、私はあらゆる恐ろしいことを心の中でもう経験してしまつたのだ。

それ以外では私は無事息災さ。きのふは國王陛下に召されて御賜宴をかたじけなう

した。王妃陛下からもいろ／＼ありがたい御説をたまはつた。下院の方は十二月四日に比して状態は少しも好調を示してゐないし、恐らく二三週中かもしれないが、解散はどうしても避けることができないやうだ。どんなに私はお前たちのところへ歸つてゆくことをあこがれてゐるだらう。昨日は私は祈禱をしてゐるうちに、お前もマリーちゃんも無事だといふ確信を持つたつもりでゐた。ところが夜になると、私はまた非常に心配し出したのだ。お前はどんなに私がお前を愛してゐるか知らないんだ、残念ながら知らないんだ。もし知つてゐるなら、お前はこんな不安な状態のもとに、どんなに私が悩んでゐるかを知つてゐるはずなんだがね。私は結局お前のことを一番心配してゐるのだ——マリーちゃんとその後よくなつたか、悪くなつたかも心配ではあるにしても。心痛と徹夜のためにお前はたうとう倒れたに違ひない。それだから何にも知らせが来ないのだ。どうか、どうか、私に手紙をよこしてくれ、そしてこの四日間のやうに、二度と私を悩ませないでくれ。あらゆるいとしい者とはなれてゐて、生死に關する病氣の知らせを一度もらつたきり、四回の郵便に一通の手紙も受取らないとい

ふことがどんなことなのか、お前にはちつとも想像がつかないんだらう。主なる神のお恵みによつて、これまでの私の暗い空想がすべて根據のないものであつて、明日はよい知らせなり、或は何らかの知らせが受取れることができるなら。どんな知らせにしろ、何にも来ないよりはすつとましなんだからね。主よ、お前とあらゆる私のいとしい者を祝福し、守護したまへ。私が立腹してゐるなど、は考へないでおくれ。私はたゞ悲しんでゐるのだ、心配してゐるのだ。もし私が心配も何もしないとしたら、私はお前を愛してゐないにちがひなんだ。さよなら、私のかはい、者よ、お前の最も忠實なるV.B.にすぐに手紙を出すやうに。

五九、妻へ

ベルリンにて、一八五一、一、八

けふやつと、私のベットよ、私は土曜日のお前の手紙を受取つた。ハイト(男爵。後臣となつた。ビスマルク夫人は)もあんまりひどいことをするぢやないか。四日もあちこち彼に手紙を頼んだのであらう。

へ寄りちらすとは。とにかくその知らせではすつかり安心できないが、どうも猩紅熱(しやうこうねつ)ぢやないやうだね。もしさうだとすると、熱はあがる一方なのだ。ドクトルの考へを、お前はちつとも書いてよこさなかつたね。祈禱はいふまでもなく丸薬(ぐわんやく)よりいゝものはちがひない。しかしそれにして神がお授けくださる醫藥も決しておろそかにしてはいけないよ。それでいゝものがあつたら、決して費用を惜しんではいけないよ。…あゝ、私のいとしい者よ、お互ひに丈夫で一日でも早く一しよになれたら、どんなにうれしいだらう。私は下院にゐるときも、往來を歩いてゐても、神があんなに恵み深くも私たちに恵んでくださつたものを、また私たちからお取り返しにならないやうに、神に祈つてゐる。金曜日には私はゲンティンへ行かなきやならない。お父さま、お母さまへくれぐれもよろしく。お前の最も忠實なる

V. B.

六〇、妻へ

フランクフルトにて、一八五一、五、一二

私の一番いといひ者よ、汽車が二十五時間も走つたあとで昨夜私をこの地へ引き渡してから、私は朝起きるとから今まで、夕方までも電報を書いたり、訪問攻めにあつたり、電報を受取つたりで休むひまもなかつたが、それまでは私たちはこんなにも遠くはなれてしまつたといふことを、全く信ずることができなかつたくらゐだ。たつた今、不平ばかり訴へる、退屈きはまる客が歸つたので、やつとお前に手紙を書くひまができたのさ。お前と子供たちの姿がどこへ行つても、仕事をしてゐても私の考へをさへぎるし、私のあこがれは距離きよりと一しよに生長して行くばかりだ。私はお前や子供たちの温泉保養をさまたげたり邪魔したりしたくなかつたのだ。もしそんなことがなければ、お前をできるだけ早くこちらへ來させるやうにしようと思つてゐたのさ。お前をこちらへ呼んでしまふと、御両親はまた力を落されるだらうとは考へるがね。

私は「エングリッシュ・ホープ」といふホテルに落ちつき、一階の立派な室を二つ取つたが、まだこゝの人になつたやうな氣が一向しないのさ。空はくもりがちで、寒いくらゐる、市まちはしかし立派だ。當地の民主黨のことなんか、お前も心配するにや及ば

ないよ。市の人は大體富裕ふゆうで保守的だ。しかし大ていオーストリアびいきだね。以前この地でおこつた暴動は中部ドイツ生れの浮浪人うろうりんがかり集められてやつたのだが、今はそんな連中は跡を絶つて、プロイセンとオーストリアの兵隊が駐屯ちゆうとんしてゐるんだ。オーストリアの兵隊といふのはティロールの獵騎兵で、それ、私たちがザルツブルクの要塞やうさいを見に行つたときにゐたのと同じものさ。……

私の出發は足もとから鳥がたつたやうにあわたゞしかつたので、私はをと、ひはいろいろのさしせまつた用事を大急ぎですまさないやならなかつた。私はお前に小包を二つ、手紙を一通、百ライヒスターラー入りの書留を一つ送つたよ。みんな受取つたかね？ 生の車輪せいのくるまわがどうしてこんなに突如として私をとらへ、あらゆるなつかしい夏の夢から私をひきさらつて、こんな所へ投げつけたのだらうか、實のところ自分ながらあきれてゐるところなんだよ。私は自分の新しい生の計畫をはつきり意識するためには、まづ落ちついていろ／＼考へをまとめなきやならないのさ。けふの晝には、私はイギリス人と一しよの食卓についてゐたんだが、私たちのかつての旅がふと思ひ出

されて、軽い哀愁を感じたよ。彼等はハイデルベルクやスイスの方へ行つて来たんださうだが、さういふ所もこゝからは造作なく行けるのだ。私たちが一しよに住めるやうになつたら、お前は、あの時はお前に病氣になられたハイデルベルクやライン河をゆつくり見に行くことができるだらう。それも二日の旅ですませるわけだが、そんなことを想像すると、私も自分の前途に光明が見えて来たやうな感じがするんだよ。私はいくらも規律正しい、生まじめな事務家になり、きちんとした仕事時間を持ち、そろ／＼老成して来るやうにつとめなければならぬ。トランプをやつたり、ダンスをやつたりする時はもう過ぎてしまつた。神は私といふものを、私が一個の眞摯な男子として國王陛下及び國土に對して私の責務をはたさねばならない場所におきめになつたのだ。神の意志をば最善の力に應じて行ふべく、私は斷乎として決心した。それに對して私の知慧が十分でないならば、私は神が十分にかつ惜しげもなくおあたへになることをお祈りしようと思つてゐる。どうか、神がお前と私たちの家族を忠實にお守りくだされ、病氣や苦しみを私たちからお遠ざけになつてくださることを。そのこ

とを私は朝も晩も前よりもつと切實に願ひしようと思つてゐるし、それが聴きとどけられることも信じてゐるのだ。私はもう筆を擱かなきやならない。六時が私の郵便を渡す時間なのだ。お前が手紙をよこすときは、切手は貼らないでいゝんだよ。さよなら、私の持つてゐる最善なる者よ。一日のうちに、私が切なる愛とあこがれでもつてお前のことを考へないときがあるだらうか。お父さま、お母さまにくれ／＼もよろしく。永久にお前の

v. B.

六一、妻へ

私のかはい、者よ

ヴィーンにて、一八五二、六、九

昨晚私はリユナール(伯爵。公使館附武官)と一しよに當地へ無事着。急ぎの電報を處置してから、上等な夕食とつめたい三鞭酒(シャパンシメ)の一びんをたのしんでからベットにはひつた。道中は暑かつたが、それ以外はなか／＼よかつたよ。相變らず、私たちがゼフィット(一七八四)

年の夏のピスマルクの新婚（旅行で知合ひになつた人）と一夜を明かしたときと同じやうな、古い、みすばらしい客車でね、一等がドイツの三等とあんまりちがはないのさ。景色はよかつた——星が照つてゐるうちに太陽がのぼつて來た時分の、ドレーズデンとプラークの間の景色、お晝頃のメーレンの連山の景色（あの當時、私たちはそこは寢すごしたんだ）、日没時分のこゝヴィーンの景色、いづれもよかつた。汽車がプラーター（ヴィーンの有
名な大公園）のそばを通り、イエーガーツァイレに沿ひ、ラムのそばをよぎつて市（まち）にはひり、柱廊のそばを通つて行つたときは、私の思ひは全く一八四七年へ飛んで行つたのさ。そのとき、何でもあるとき私たちははじめてお互ひに顔をふくらしあつたことを思ひ出したが、今考へるとなせだつたかおぼえてゐない。とにかく私のせみだつたと思ふ。それから今に至るまで、私たちはどのくらゐ主のお恵みを受けてゐることだらう。あの時分は、私たちの間に子供ができるなどは、お前は考へてもゐなかつたと思ふ。

こんなことを書かすにゐられなくなつたので、とりいそいでこの手紙を書いたんだよ。……神の恵み深い保護（ほご）がお前たちすべての上にあれよ。——リュナールは朝食を

食べてゐるが、よろしくといつてゐるよ。お前の最も忠實なる

v. B.

六二、レオポルト・フォン・ゲルラッハへ

一八五二、八、二

拜啓

息子（二男
ルヘルム）が昨夜十二時が鳴つたときに生れました。神の御慈悲によつて、幸ひ安産でした。八月一日でせうか、それとも八月二日でせうか？ 投票の必要がありさうです。赤ん坊は時計の響いてゐるうちに泣聲を發したのです。……令夫人にどうぞよろしく。忠實のあなたの者なる

v.ピスマルク

* プロイセンの將軍、フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世の侍從武官。

六三、兄へ

フランクフルトにて、一八五三、三、一七

親愛なる兄上様

今日も少しであなたに手紙をあげそこなふところでした。何しろ、朝起きてから今まで——丁度三時です——といふもの、訪問客ばかりでしてね、今やつとひとりになつたやうな始末ですから。そんなわけで、今日の一日を今までたまつてゐる訪問をすますために利用しようと思つてゐたことも、だめになつてしまひました。プロケツシュ(男爵。當時はベルリン駐在オーストリア公使)の落ちつかない、それでゐて不得要領ふとくせうりやうな、不正直なやり方のために、いろ／＼面倒な事務ができて來ますし、それからデインナーとかお茶の會がひつきりなし。そんなものも、ひまつぶしであると同時に實に退屈なもんですがね。食事にしたところで、たゞ時間を殺すために、いろ／＼こつたものを食べに歩かせられるんですが、そんなものも結局肝臓組織を悪くするくらゐがおちなんですか。そのほか、とき／＼何日も運動不足がつづくために、卒中さきぶれの前兆さきぶれみたいな發作なんかおこりましてね。こんな始末で、ほんとに弱つてゐるんです。

フィリップ(ピスマルクの兄の子)が利口な少年になつて來たといふのは、何よりうれしく思ひ

ます。……私の方の上の二人はありがたいことに丈夫なんですがね、一番下のが數日來大分弱つてゐるんですよ。齒生熱と感冒とが一しよに來てゐまして、いつもすばらしく食べる子がちつとも食慾がないのです。皆さんおそろひでほんとにこの春にやつて來てくださると、ほんとにうれしいんですが。おいでくださつたらしばらく滞在してください。こゝはライン河やタウヌスやオーデンの森やバーデン・バーデン、等々への一日旅行のたいへん都合のいゝ中心點になつてゐますからね。それで皆さんで私の家うちでおとまりになれるやうになつてゐますよ。おや、おや、また客です。退屈なピフテキ君、すなはちイギリスの公使がやつて來たんです。それではこれで筆をとめます。ヨハンナからもよろしく。何はともあれ、おいでください、私たちは大いに歓迎するつもりです。あなたの忠實なる弟

v. B.

私のかはい、者よ

友人の勧誘くわんゆうとほかの事情とで、私はもう五六日こゝに滞在する氣になつた。まだ二三の政治家とも會つてみる必要があるので、かたゞ明日はフォンテンブローの鹿狩しかがりに同行しようと思つてゐる。こんなに滞在たざいをのばして家を留守にすることをゆるしてもらひたい。そのかはり私はすつかり丈夫になり、元氣になつて——これからは海水浴などをしないで——家へ歸ることをお前に約束しておくよ。オステンド(ベルギーの)を廻つて歸るのは多分やめにするだらう。さうすればまた三四日早く歸れるわけになる。とにかく私はこの週の最後の三日間のうちのある日、遅くとも土曜日(九月八日)には歸れるよ。どうも不思議な都會まちだね、このパリといふところは。まあフランクフルトの十倍ぐらゐるもあらうか、櫛くしの齒のやうに商店のなるんでゐる市街が幾重いくへにも列をなしてゐるし、その市街の一つ一つが満員の列車が三つも到着したあとのガルレン通のやうな騒ぎなんだね。さうかと思ふとフランクフルトよりもずつと靜かなフランクフルトの十倍ぐらゐるの地域ちゆうきが周圍をとりまいてゐる。郊外の一部は非常に景色がい

いんだ。丁度水のないチウリツヒ湖の岸邊のやうなところだよ。もつともセーヌ河といふものがあるが、こりやマイン河より小さいね。郊外は綠色につらなつてゐて、丘陵きやうりやうがあり、その中に白い家々や町や村落が散在さんざいしてゐるのさ。來年も生きてゐて、丈夫だつたら、私はお前と一しよにリヨンを通つてマルセーユの方へ旅し、それからピレネー山脈に沿うて、バイヨン、ボルドー及びパリを通つて歸つてみたいと思ふ。それは三週間の旅行で、都合によつてはもう少しへらすこともできるんだね。費用は私たち二人で千フローリン(二シリングはイギリスの)に相當する)ぐらゐだらう。私は今でもさうやつてみようといふ氣持になるのだが、一人ではしかし行きたくないよ。この二日間といふもの、まるで秋のやうで、風がはげしく吹き荒れ、木の葉がさかんに落ちるのだ。一日の半分は私はホームシックになつてゐるが、残りの半分はそれになりきる時間がないのさ。この手紙の返事をよこしてもらつても、こゝでは私の手にはひらないよ。お前が私の歸る前にこちらへ手紙をよこさうといふ氣にならなかつたら、私は知らせがなくとも、家うちのみんなが、とりわけ私のかはい、者なるお前が丈夫だといふ、神のお

慈悲に對する信頼で満足するでしょう。私たちはとにかく二週間ばかりライン河の空気を享受するといふ楽しみを持ちたいと思つてゐる。王陛下がおいでにならないならば、スイスの空気をも吸つてみたい。私たちは四五日うちに口でもつて相談しよう。それまで、御機嫌よう。なつかしい御両親や子供たちへよろしく。神がお前すべてをお守りくださるやうに。お前の最も忠實なる

v. B.

六五、妻へ

コペンハーゲンにて、一八五七、八、六

私のかはい、者よ

今朝七時、當地へ無事着。船旅はたいへん愉快だつたよ。やはらかな風、赤い月、月に照らされたタール樽のつまれてある白聖岩、海で二度あつた雷雨、一人の美しいスエーデンの女、それに風もいくらかあつた。まあこれ以上の贅澤はいへないね。ただ夜があまり美しかつたので、眠れなかつたのさ。ところが二時に雨が降り出して來

たので、甲板からおりて來ると、下の方はたいへん暑くて、人いきれでいつばいなさ。だから三時頃にはまたマントーをきて、シガーを持つて甲板へあがつちやつたやうなわけなんだ。今私は海水浴をやつて來て、蝦で朝食をした、めた。一時半、參内することになつてゐるが、歸つて來たら、二時間ばかり眠るつもりさ。みんなにくれぐれもよろしく。お前の

v. B.

六六、妻へ

ネースピホルム(スエーデンの)にて、一八五七、八、九

私のかはい、者よ

コペンハーゲンへつくとすぐに出した短い手紙は、もうついたらうね。あれから二日間はそこの博物館を見て廻つたり、政治家と會つたりしてすごしたのさ。昨日マルミエーの方へ渡り、それから約八マイルばかり東北の方へ汽車で行つて、そこで上記の場所にブリクセン男爵の賓客として、大きな湖水にとりかこまれた半島の高いところ

ろにある、白い城のなかに滞留してゐるわけなんだ。窓ごしに柵かしばの密林が見えるが、それでもその林をすかして、湖水や向う岸の丘陵も少しは見すかされる。太陽はかゞやきわたり、蠅はブン／＼いつてゐる。私のうしろにはフォン・ヘッセン公がゐて、居眠りしながら何か読んでゐるのさ。窓の下では悠長いうちやうなスエーデン語が話されてゐるし、厨くりやからはおろしの音が鋸のこをひくやうにひびいて來るのだ。現在について報告することゝては、まあそんなことぐらゐさ。昨日私たちは野呂鹿狩のろしかがりに行つて、一頭ものにしたが、私は射たなかつたよ。雨にあつて、ビショ／＼になり、歸つてからホットワインを飲んで、六時間熟睡じゆくするしたのさ。こゝの野呂鹿は私がこれまで見たのよりはすつと大きい。この邊の景色は私が想像してゐたよりはすつと美しいよ。立派な山毛櫨ぶなの森があり、丘陵や庭には大人ぐらゐの太さの胡桃くるみの樹があるのさ。たつた今私たちは雉きじの禁獵場を見物して來たが、食後には湖水に船を乗り出すつもり、銃の音でこの美しい寂寞境せきばくきやうの日曜日の静けさをかき亂すことを何とも思はなければ、鴨の一羽ぐらゐ射つて來られるかもしれないよ。あすは大々的に狩獵かりをやることになつてゐる。……

これまでお前から一向手紙が來ないが、多分今日は恐らくヘクラ(船の名?)と一しよに手紙が一通ついたと思ふし、さうすれば今晚は私の手にはひるだらう。なつかしい御兩親や子供たちへくれぐれもよろしく。とにかくつとめて手紙を書いておよこし。せめて一週間に二度はね。いつもコペンハーゲンへ向けて。そこから廻送くわいそうしてもらふことにしてあるから。主しゆなる神がお前たちすべてをお守りくださいされ、私たちによるこばしい再會をお授けくださるやうに。お前の最も忠實なる

V. B.

六七、息子のヘルバートへ マイン河畔*フランクフルトにて、一五五八、七、二九

私のかはい、息子よ

はじめてお前に手紙をあげるんだがね、あんまりうれしくないことで手紙を出すのは、ざんねんだね。マ、の手紙でみると、お前はまた體が悪くなつて、ほかの者が庭でとびまはつてゐるのにおとなしく寝てゐなきやならないさうで、ほんとにかはいさ

うだと思つてゐるよ。マ、はしかし、お前がたいへん辛抱しんぼうづよく、機嫌きげんもいゝし、わがま、も言はずに、神さまがお前におつかはしになつたので、人間の力ではどうにもならないことをこらへてゐると、手紙に書いて來たがね。それを讀んで私はほんとうらしく思つてゐるのさ。それで神さまにお前をお助けくださるやうに、ちやんとお願いして、始終用心をしておとなくしてゐれば、もうすぐによくなくなるにきまつてゐるよ。

庭の草がだいぶ大きくなつた。家鴨あひるがその中を歩きまはつてゐる。どの樹にも果實みみがいつぱいなつてゐるよ。李すももや梨なしなんかどう始末して、か、こまつてゐるくらゐなのさ。もつとも土曜日のひどい嵐で大分ゆすりおとされてしまつたがね。水泳場では一層ひどく吹き荒れたとみえて、一番奥の方にあつたテントの列はすっかり倒されてしまひ、お前たちが服をぬぐことになつてゐた前の方は、ほとんどバラ／＼になつてしまつたよ。

さよなら、私のいとしい息子よ。神さまがお前をお守りくださるやうに。マリーや



つ向。ちた供子たしくつけ傾を情愛いしげはのそがクルナスビ相宰血鐵
トーバルへ男長、ーリマ女長、(タルヘルイザ)ルビ男二 りよ左て

ビルによろしく。早く丈夫におなり。お前の忠實なるお父さん

V. ビスマルク

* フランクフルトといふ都會はもう一つ別にオーデル河畔にもあるゆゑ、それを子供にはつきりさせるために、特にマイン河畔と書いたのであらう。

六八、娘マリーへ

私のたつた一人の娘よ

ベルリンにて、一八五九、三、一七

お前たちが近頃書いてよこした二つの手紙に對して、お前及びお前の二人の弟にお禮をいふよ。矢繼^{やつぎばや}早にまたおよこし。お前たちやマ、さんとも大分久しく顔を合はさず、たくさんの他人にばかり取りかこまれてゐるので、お父さんはずるぶんさびしくなることがよくあるんでね。私は丁度今、自分で煮立たせたお茶を飲んでゐるところなんだがね。お前が注いでくれたら、私はどんなにかうれしいだらう。叔母さんのマルヴィーネのところへは私は毎日行くよ。娘のマリーちゃんは大きな、丈夫さうなお

嬢さんになつた。目方が七十ポンドもあるんだとき。マ、の手紙でみると、お前とヘルバートは齒醫者の厄介になつてゐるさうだが、さぞかし痛かつたらうね。しかし神様がお前の上におかけになつた苦しみを、お前は我慢づよくこらへたさうで、私はうれしく思つてゐるよ。お前は少女の^{じよめ}ことだから、もとより戦争なんかに出ることはないがね、しかしだん／＼年を取るにつれて、人生といふものはさまざまの體の^{からだ}苦痛や心の悩みをお前にあたへるにちがひないからね、さういふときに、お前がもう子供のうちから、さういふ苦痛を氣丈夫に、おちついた氣持でこらへることに慣れてゐると、たいへん役に立つのだよ。それからマ、にかうおつたへしておくれ、サッサウ大公夫人のところへはもう行かなくともいゝが、カール・フォン・ヘッセンの妃殿下にはもう一度お暇^{いとがひ}乞ひにあがつたらいいだらう、とね——もつとも彼女(マ、のことだよ)が妃殿下のダルムシュタットへお歸りになるまへに、フランクフルトを立つてしまつてゐなければだよ。妃殿下がマ、の出發するまへにダルムシュタットへ向けてお立ちになるやうだつたら、マ、はお暇乞ひに^{しんごう}伺候したらいいだらう、といふことになるんだ

がね。この傳言^{こゝとつて}はしかしたマ、だけにお話して、ほかの人には言はなくていいんだよ、私の小さなハートさん。

けふは私は叔父さんのオスカルと叔母さんのマルヴィーネと一緒にロシア公使に招かれて御馳走になつたのさ。あすはポイツェンブルクの人のところへ行くことになつてゐる。土曜日には私はたぶん日がへりのつもりでシェーンハウゼンへ出かけるだらう。それでマ、に、お前たちと一しよに(お前たちがやつて來られたらばね)ゲンテインまで行つてだね、そこからシェーンハウゼンへ行くやうにお願ひしておくれ。私たちがロシアへ(大使と)赴任^{しんじん}する前に、お前たちがもう一度そこへ行つてくれるといいと思つてゐるんだからね。私は火曜日の夕方出發しようと思つてゐる。それから水曜日の午後にはキエーニツヒスベルクにつくし、そこで一晩あかして木曜日にはダムピンネン、コウノー、デューナブルクを通つてプレスコフへ向ふつもりなのさ。さうすると日曜日までは夜も晝も汽車に乗つてゐることになるだらう。それからまた汽車に乗ると、八時間で私はペーターズブルクへつれて行かれるわけなんだよ。來週のけ

ふの今時分は私はたぶんダムビンネンあたりにあることになるのだが、それがどの邊になるか、一つ地圖でしらべてみてごらん。

ヘルバートとビルにくれぐれもよろしく。それからペーターズブルクへ行つたら手紙をやると、二人に言つておくれ。神様に一生懸命においのりして、私たちみんなをお守りくださるやう、早く私たちを一しよにしてください。お願ひおし。お前の忠實なるパパさん

V. B.

六九、妻へ

ペーターズブルクにて、一八五九、四、一

私のいとしい者よ！ 今日はお前と子供たちとの手紙によつて、いかに愉快に私は呼びおこされたであらう。それから半時間といふもの、私は三百マイルが私たちをへだて、あるといふことを忘れることができたのだ。

四日。以上の短い言葉を私は私の誕生日(ビスマルクは一八一五年四月一日に生れた)に自分で書いたのだ。

書き出すとすぐにまた事務につかまつてしまつたのさ。私が私の役目(ロシア駐劄大使として)を丁度四月一日に始めたといふのは、どうも奇縁き縁だよ。といふのは、皇帝陛下(ヴィルヘルム一世)に初めて謁見えつけんおほせつかつたのがやはりこの日だつたが、それは陛下の實にありがたい思召によつてほんとに私の誕生日のお祝ひ物になつたのだ。それから私はクリューパー(フリードリッヒ・カール)と一しよにお前の健康を祝して一びんのラインワインと一本の三鞭酒サンシとを飲んだ。合計七ループルで私たちはほんとに愉快になつたのさ。會議でもつて私はすつかりまるつてしまふのだ。昨朝以來五時間といふもの、私はマイエンドルフのところではやべりつゞけ、五時間眠つただけ。そのほかは今まで、すなはち午後三時までものを書いたり、書き取らせたり、やむをえない訪問をやつたりした。クリューパーは助手としては大して役に立たず、ヴェルテルン(男爵・大使館一等書記官)はまたぶつぶつ言ひ始めた。三十分以内にこの手紙は出さなければならぬんだよ。四時半には皇太后陛下のもとで餐さんをたまはることになつてゐる。光榮の至りである。……

私はお前に長い手紙を書かうと思つたのだ、私のいとしい天使よ。ところで私は今

や大急ぎでぬたくらなきやならない。かうなるといつそだれにも書かない方がよさうだね。四月十三日(當地では一日)には、私は當地でもう一度誕生日たんじやうびを祝ふことになる。さうするとお前のなつかしい誕生日と大體一致するわけだね。(ヨハンナ夫人の誕生日は四月十一日。ロシアでは當時ユリアン曆を用ひたので、グレゴリオ曆を用ひる國に比し、月日が十日づつおくられてゐた。例へばロシアの四月一日はドイツの四月十三日に當つた)ネヴ河は花崗岩のやうにかたくなつてゐて、荷車を浮かべてゐるし、街燈も横斷路の氷の上に立つてゐるのさ。私に代つて子供たちに接吻せつぽんしておくれ、そしていつも私の最善なるものであつておくれ。神がお前たちと共にあれよ。お前の最も忠實なる

V. B.

* ビスマルクはロシア大使として、そこへ赴任したのである。

七〇、妻へ

ペーターズブルクにて、一八五九、四、四

私のかはい、者よ！ 午前中の手紙のラッシュアワーが過ぎてしまつたので、夕方のゆつくりした時間を利用してお前にもう數行書きそへることにする。私が今日私の

手紙を書き終へたときに、何よりも先にお前の誕生日のお祝ひをのべようと思つて書き出したのであるが、それにはまだ大分間があると思つたのさ。何しろ、當地では今日は三月二十三日だからね。ところが今よく考へてみると、十一日までにフランクフルトへつくべき手紙なら、丁度今日出さなきやならないことに気がついた。郵便がつくまでに一週間の時日がかゝるといふやうなことには、なか／＼頭が慣なれて來ないものだね。そんなわけだから私は急いで祝意をのべなきやならない。神がお前にあらゆるお前の愛と忠實とに對して心靈的にも肉體的にもその豊かな祝福をお授けになり、そしてお前がこの世において當面する、さまざまの新しい状態やお前の心の好みに矛盾する状態むじゆんに關しての諦念あきらめと満足とをお前にあたへ給はんことを。六十度の緯度(ペーター)は移せるものではない。そして私たちは私たちの運命を自分から求めたわけではない。多くの人々が當地では幸福さうにくらしてゐる——氷はまた岩石のやうに堅く、夜になると雪が降り出し、庭園もタウヌス山脈(ライン州のシーファア山脈の東南部。その山はフランクフルトからよく眺められる)の眺めもないのだが。お前も同じやうにくらしてゐることがわかりさへすれ

ば、それから何よりもお前が私のそばにゐられるやうになりさへすれば、當地にゐても私は非常に幸福になれるんだがね。

あらゆる官職上の關係——それらの關係こそ何といつても、この世において私に授けられたところの天職であり、さらにお前がコルチッピロウの教會(そこでビスマルク夫妻の結婚式が挙げられたの)におけるお前の意味深い快諾の『はい』に従つて、これまでずつと私を勇氣づけて来たところの天職であるが、——さういふすべての官職上の關係はフランクフルトと比較すれば、茨からばらになつたやうなものさ。それらのばらがいつでも花咲くであらうかどうかは、もちろん確實とはいへない。同盟(ドイツ)の奸計(かんけい)や議長(ぎぎ)の押し流す毒素は當地に来て考へてみると、まるで子供だましのやうな感があるね。私たちは當地では、私たちの方で氣を負うて威張(おご)つたりしなれば、大てい歓迎されるのさ。家へ歸るとき人待ち顔の侍室(ともまちや)へプロイセンの馬車を一臺とどなり込むと、そこにゐるロシア人の顔はどれも、たつた今九十度のブランデーを舌打ちして飲みでもしたかのやうに、人のよさうな微笑をもつてお互ひに顔を見まはすのさ。社交會などは毎晩

のやうにあるが、そこへ来る人たちはフランクフルトとは大分ちがつてゐるんだよ。宮廷生活(きやうていせい)に對するお前の反感もこちらへ来たらいくらか變つて来るかもしれないね。皇帝陛下はお前もきつと好感をもつにちがひないやうな方だ。お前はたしか前にお見受けしたことがあつたらう。陛下は私に對してときどき、非常にありがたいお言葉をたまはるし、皇后陛下の方も同様であらせられるのだ。皇太后陛下はたいへん威嚴があまりだが、お交際(つぎあひ)の方は割に氣輕でいらつしやるのさ。けふは皇太后陛下に召されて、マイエンドルフやローエンと一しよに餐をたまはつた。丁度それは國にゐる時分カール内親王殿下やアンナ内親王殿下にお呼ばれたときと同じやうに、なか／＼愉快なのさ。要するに、どんな窮屈なところへ出てもなあとと思つてゐれば、早い話がたばこはらくにのめるのだよ！

私は今までのところ氣持のいい印象ばかりを受けてゐるが、どうも氣にくはないことが一つあるのさ。それは街上で喫煙してはいけないことなんだ。家はまだ借りてない。當分まあ仕方がなからう。誰に聞いてみても、あいてゐる家があるといふことを

きかないんだからね。とりわけリテーニヤの方面には一軒もないといふ話なんだね。ビユツチュ(今まで使つてゐる)は一しよにやつて来るわけに行かず、ハムを呼びよせるにしても、あんまり役に立ちさうにもない。とにかくロシア語のしやべれない従僕は、家のなかだけしか使へないわけだからね。それにしてもハムは呼びよせたいと思つてゐる。プロイセンで馬を買つてもらふつもりゆゑ、それを彼につれて来てもらひたいのだ。ロシアの馬丁は使ひたくないんでね。私の書物机は賣り拂つて、新しい、前よりずつと大きいのを買つてよこしてもらひたい。お前の圓筒形の机のやうな種類のがいゝが、しかしずつと大きいのをね。いゝのが見つからなかつたら、ベルリンで探してもらつておくれ。高くつてもかまはないから、上品でしつかりしたのをだよ。買へたらそれをそこから帆前船ほんぜんせんの荷にしておくつてもらひたいのだ。私は實のところ、どうしてお前がこんなに長くフランクフルトにとどまつてゐるのかわからないんだがね。そこにゐるのが好きなら、そりやそれがかまはないが、とにかく入用な物を送り出すことは、早くしてもらひたいよ。とにかくお前が来るときにやみんな持つて来て

もらひたいんだ。實のところ、送り出したところで道中がなか／＼かゝるだらう、二三ヶ月かゝらないとも限らないと、私は心配してゐるのだよ。いろ／＼の書類や道具の始末にしてもちやんとした自分の机や何かがないと、私はどうも困るんでね。一番の早道は、一切の家具を一艘の船でオランダから送り出すことなんだ。底の浅い船でいゝと思ふが、しかし中には大きな船でないものがあるかもしれない。そりやまあクロンシュタットまでしか行かないだらうがね。どうもめんだうくさいことばかり書いて、申譯ない。實は當地の珍しいことや話のわかる婦人たちの話をお前にきかせたかつたんだがね。こゝでは社交會には十一時頃出かけるのだ。昨日なんか私は十時二十分に顔を出して、第一着なのさ。それで夜の十二時か、十二時半ぐらゐまで會がつゞくのだ。

電報*

御機嫌よう、おめでたう、こちらは無事、ネワ河はまだかたい。

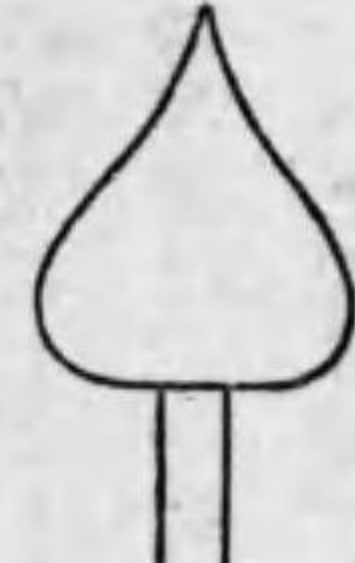
* 夫人の誕生日を祝へる電報である。



七二、妻へ

モスクワにて、一八五九、六、八

この都市はほんとに、都市としては、一番美しい、一番獨創的なものである。郊外はきれいといふのでもなく、むさくるしいといふのでもなく、とにかく感じがいい。しかしクレムリン宮殿から緑の屋根の家屋や庭園や教會や、それは奇妙な形と色を持つてる塔などのパノラマを見おろした景色といつたら、さらにさういふすべてのものが夕陽にな、めに照らし出されたときの異様な美しさといつたら、ほかでは恐らく見られないであらう。それにそれらの塔はたし



かに千ぐらゐはあらうか、大ていは緑か赤か淡青色で、上の方にほとんどすべてといつてもいいくらゐに、大きな、金の玉葱形たまねぎがたがついてゐるのさ。一つの教會に大てい一つか五つはついてゐるんだね。天氣はまた晴れわたつて來た。私は當地にもう二三日滞在するつもり——イタリヤにおける大きな戦ひマゲンタの戦。そこでオーストリア軍が敗れたのうはさがあまりひろがらない以上は。その戦ひの結果、いろ／＼また外交上の問題がもちやがること、思ふが、さうなつたら、私は自分の部署ぶしよにつかねばならないのだ。

私がこの手紙を書いてゐる家はすゐぶんまた變つた建築でね、一八一二年ナポレオンがロシアに攻め入つたとき、ロシア人はモスクワに火を放つて、いはゆる焦土戦術をやつたのであるの災厄さいやくをまぬかれた少數の建物の一つ。古い、分厚な壁べきはシェーンハウゼンなどのと變つてゐないが、建て方は東國風で、全體がマウル風マウル人は北アフリカの住民なんだね。大きな室が幾つかあるが、大てい、ユスポフの所有地を管理してゐる、もしくははい、加減に管理してゐる事務員に占領されてゐるのさ。彼と彼の奥さんと私とが、まあ住心地のいい、翼屋はなれの方を占領してゐるんだよ。千度の挨拶を。お前の最も忠實なる

V. B.

七三、アルブレヒト・フォン・ローンへ*

フランクフルトにて、一八六一、七、一七、朝の六時

親愛なるローン君

僕たちは顔を合はせるわけにや行かないのかね？ 君をベルリンで待つてゐようと
思つたが、シュライニッツ(伯。プロイセの外務卿)ができるだけ早くバーデンの方へ行くやうに
僕に頼むのでだめになつてしまつたのさ。ところでバーデンへ行つてみるといろ／＼
の事務だの、例の暗殺計畫(一八六一年七月十四日における國王ウイルクに對する大學生ベツカールの暗殺計畫)などにひつかつて、
思つたより長く滞在してしまつたが、新聞でみると、君は丁度バーデンへ行く途中ら
しいね。僕はきのふ、君の軍務省(ぐんむしやう)に電報を打つたが、返電一つ来ないのさ。打つたつ
て、タゞのわけなんだがね。僕は君がどこにゐるのか、いつ君が旅行に出るのかと、
きいてみたんだ。それに返信料も先拂ひしたんだせ。君がこの次の列車で来るのだと

いふことがわかつてゐたら、僕は君をこゝで待つてゐたんだがね。さういふわけで電
報を打つたのさ。しかし一向あてにならないのにこゝで待つてゐるには、僕の間は
あまりつまりすぎてゐるんだよ。僕はまだ七八週間は鑛泉(くわんせん)を飲んだり、海水浴をする
やうに言はれてゐるのだ。それからいろ／＼の人を訪問することがあとにひかへてゐ
るのだ。さうすると會つたところで、さしあたり、お互ひの経験を交換するぐらゐの
ことしかできないわけぢやないかね。僕の電報が正確に發送されたことが確かだつた
ら、僕は軍務省から返電のないところからして、君がおそらくこちらへ来る途中であ
る、或はまたコブレンツの方をまはつたかもしれないといふことを推論(すゐろん)したはずなん
だがね。とにかく、空なことをあてにして私は待つてゐるわけにはいかない。當分僕
はラインフェルトで四週間ばかりキツシンガー(キツシンゲの鑛泉水)を飲み、それから海水浴へ
行くつもりだよ。

御機嫌よう。スイス旅行の愉快ならんことをいひのる。君の

V. B.

* 一八六一年以來プロイセンの軍務卿。

七四、兄へ

親愛なる兄上

フライエンブルトを汽車で通り越して、お立ちよりしませんでした。どうか悪しからず。ナウガルトの方へ電報をお打ちくださつたら、あなたに都合をお知らせするところでしたが。……あなたの誕生日に私の心からの祝意を申し送ります。……たとへ三四日でも御都合がつかましたら、マルヴィーネと御一しよにラインフェルトかシユトルプミューンデの方へ私たちをお訪ねくださると、うれしいのですがね。私は體の工合はまづいゝ方です。たゞペーターズブルクからの五百マイルの旅で、體が妙にだるく、暑さがこたへるんですね。早くラインフェルトへ行つて、おちつきたいと思つてゐます。たゞキツシゲン^{キツシゲン}の鑛泉水がついて廻らないとありがたいんですが。バーデンで例の狂人沙汰の暗殺計畫^{暗殺計畫}のあつたときには私はもうちよつとのちがひでそこに

ベルリンにて、一八六一、七、一八

ゐあはせたわけなんです。私は國王陛下^{プロイネーデー}を丁度散歩道でお探し申してゐたのですが、陛下にお會ひできたのは出来事がおこつてから十五分ばかりの時でした。御襟のところから服の裏をお垂らしになりながら、人目をひいたり、人だかりがするので、いくらか御不興^{ごふきよう}げに見受けられました。それ以外は至つて晴々とした御様子でした。かへつておそばにゐられた王妃陛下やヘレーネ大公夫人^{ヴェルテンベルクの内親王、ロ}やお附の女官たちの方がひどく興奮してゐられるやうでしたよ。私の出發はそのために四五日延びることになつたので、今大分あわてゝゐるところです。さよなら、皆さんにくれぐれもよろしく。私は十二時に汽車に乗らなければなりません。その前にちよつとシユライニッツに面會します。もうすぐに十一時です。ベルンシユトルフ^{アルプ}・フォン・ベルンシユトルフ伯^{ロン}がシユライニッツの代りに歸つて来るさうです。シユライニッツはそれで宮内卿^{ないきやう}となるんださうです。ロンドンの位置はさしむきあけておくさうですが、しかし大分獵官運動^{れつくわん}がおこることです。たゞし私の氣持は動きません。私はむしろペーターズブルクにとゞまつてゐたいのです。轉任は望みません。も

少して私は内務卿になるところだつたんですが、しかしこの方面には實にいろいろの障碍がありますのでね。特に悪辣な管區指導官が多いためにです。この一派に對しては何らかの方法で鐵槌を加へねばならないでせう。さしあたり全内閣はシュライニツツのほかはそのまゝです。私はペーターズブルクに冬をすごす心構へをしてゐるので、あなたの忠實なる弟より

七五、兄へ

ラインフェルトにて、一八六一、七、二四

親愛なる兄上

今日のあなたの誕生日はたいへん暑い誕生日ですが、それでも私は、ベルリンで急いで書いて差上げたところの、私の心からの祝意をくりかへさずに、この日を取りにがすわけにはゆきません。その祝意を今日の晝には一つ、キッシンゲンの鑛泉水と調和するぐらゐの三鞭酒の量を以て一そう強めたいと思つてゐます。私は當地にカタル

性感冒と咳をお土産に持つて來たんです。ペーターズブルクからバーデンやガルレン山を通つて來るうちにたび／＼冷えたのが積り積つた結果でせう。今日はしかし大分らくになりました。二週間乃至二十日の豫定で私は子供をつれずに、シュトルブミュンデへ行き、そこで約三週間海水浴することにきめてゐます。しかしそこがあまり冷たいやうでしたら、そこをやめにしてオステンド(ベルギー)かディエツプ(フラン)の方へ行くことになつてゐます。體さへ丈夫になれば、どこへ行つてもさう冷たくはないでせう。モリッツ(前出。フォン・ブ)とアレキサンダー・ペロウもシュトルブミュンデに來るはずでせう。あなたが、できるならマルヴィーネと御一しよに、當地なり、シュトルブミュンデに三四日の豫定でおいでくださると、すてきなんですがね。あなた方がシュトルブミュンデの方に私たちをお訪ねくださるなら、ヨハンナと子供たちもきつとそちらへ行くだらうと思ひます。……私はたぶん戴冠式の終らないうちはペーターズブルクへは歸らないでせう。恐らく私はまた、シュライニツツが私に話したやうに、パリの方へ轉任させられるかもしれません。私はしかし、今のまゝおちついてネ

ヴ河のほとり(ペーグラー)にとゞまりたいと言つておきました。

毎日鑛泉水を飲んだり、散歩したり、温泉に浴したりしてゐますが暑いのでまゐつてゐます。早くこんなことはしまひにしたいものと思ひます。隣接地方では今ライ麥が刈られ出しましたが、ラインフェルトではまだです。この暑さではずゐぶんこたへる勞働でせう……

マルヴィーネにくれぐれもよろしく。當地なり、或はあなたのところで、そのうちお目にかゝりませう。あなたの忠實なる弟より

七六、娘マリーへ

私のかはい、マリーよ

お前も、お前のかはいさうなマ、が手紙を書けないときは、お手傳ひをしてあげたら、どうだね。さうすればお前たちが神のお恵みでもつてみんな無事であることを、

パリにて、一八六二、六、一六

お父さんは度々きけるわけだからね。六日間といふものお父さんは手紙を一つももらはなかつたが、やつと今朝リムベルク(ビスマルク)の從僕が十三日の日附の手紙をお父さんのところへ持つて來たんだ。それで見ると、みんな揃つて元氣だといふことがわかつて、神様に感謝もし、よろこびもしたよ。パリではお父さんはかなり寂しいのだよ。そのうへ涼しすぎて、毎日雨なのさ。家はずゐぶん大きいし、ずゐぶん高いが、居心地ゐごちのいゝ室なんかどこにもないんだね。それに家のなかで何となくかびくさくつて、室の間取りと來たら實にひどいのさ。どこも北向きでね。ところで午前中はすつと、何か用のある人の來てゐない時間といふものは、十五分とないんだから、たまらないよ。私のたつた一つの慰めは大きな樹やたくさんさんのばらのある小さな庭なんだがね、そこへは野鳩だの、つぐみだの、うそだの、ほ、じろだの、いろんな種類の鳥が噴井戸ふきいどのところまで水を飲んだり、ゆゑみをしにやつて來るのさ。けふはお父さんはシュテューグリッツ夫人(シュテューグリッツ男爵)の家で御 走になつたが、夫人はナデイ(ナデイ・ユーン)にバヴロフツォッフ夫人(後)の長い手紙を一つ持つてゐたよ。夫人はシュテューグリッツ公園

にある島のなかに住居を持つてゐてね、ローエン(レオポルト・フォン・ローエン。ペーター
やシュリエツツアー(クリエツツアー。外交官)と食事を一しよにしたり、とき／＼乗馬もや
るやうな人なんだ。

お前たちもペータースブルクのえらい火災のことは新聞で読んで知つてゐるだらうが、それでもつて、同市の市民は上下を問はず非常な不安におちいつてゐるのだよ。都市の大部分がすつかりやられてしまつた。チューキンンドウヴォールにしても、アブラクシンンドウヴォールにしても。両方ともマ、はよく御存じなのさ。しらみの市場だの、ブルイエフ(内務大臣)が住んでゐた内務省も焼けてしまつたし、トロイキー・ペロイルークまでの市區なども、角のユリエ・シュテイーグリッツ(銀行家
の夫人)の家の側まで、すつかり焼け落ちてしまつたし、銀行やアニツチュコフ宮殿や總本山のペロセルスキーなども幾度か火をかぶつたさうだ。今度また無名の手紙で、ナデイの住んでゐたポツチュタマスカ街に放火すると脅おびやかしたものがあつたさ。ペータースブルクでは、放火者はポーランドの謀叛人むほんにんで、彼等はさういふわけでかへつて貧しい、人家

の建てこんである市區に放火したんだと、みんな見當をつけてゐるんだね。つまりさうすれば宿なしになつた人たちが絶望におちいつて、騒動さわぎをひきおこすだらうといふ勘定なのさ。カレチナーヤやヤムスカヤの方面では、百人以上の貧しい辻馬車屋が馬車や馬をすつかり焼かれてしまつたといふことだ。實に悪い人間があるもんだね！ロシヤの士官で皇帝に對する謀叛のためにとらへられたものも幾人かある。私たちは秩序あつじよを回復するために、結局はもう一度ペータースブルクへ行かなければならぬのだ。私たちがそこをみた間はそんなことは決しておこらなかつたのだ。それはさうと、お父さんはお前たちにそのうちバリの案内をしてあげられるほど、こゝに長くゐられるかどうか、やつぱりわからないんだよ。そりやこゝにはいろ／＼見物するものはあるんだがね。まあおそかれ早かれお前たちもこゝを見物することができるとだらう。しかし今のところでは私たちの親愛なる國王様(ドイツ皇帝ウイヘルム一世
は同時にプロイセンの國王)がどんな役を私におほせつけになるか、まだわからないのさ。お祖父さま、お前の弟たち、お祖母さま、マ、にくれ／＼もよろしく。お前たちがこちらへやつて来て、ネヴ河の

ほとりにゐたときのやうにおちつけるかどうか、どうもまだわからないのさ。さよなら、私のいとしい娘よ。手紙をよこしておくれ。お前の忠實なるお父さま V. B.

* フランス大使時代。

七七、妻へ

ロンドンにて、一八六二、六、三〇

私のいとしい者よ

何といつてもロンドンへは一度はやつて来なきやならなかつたよ。私はハリ・アルニム(オスカール・フォン)と今日の九時にパリを出發して、カナル(英佛海峡)の兩側にほんといに美しい緑の國を眺めながら、爽快な潮風に吹かれて来たが、一時間ばかり前に目ざすロンドンに到着した。ブローニユからフォークストーンまでは船で一時間と四十五分ばかり。今私はグロヴナー區、パーク街四十一番地Cの感じのよい室にゐて、食事を待つてゐるところ、大分空腹を感じてゐるのさ。——今、食事を終つて、これ

から外出するから、手紙はこれだけ。私はお前にたゞ、無事こゝに着いてお前に心からの挨拶をするといふことを言ひたかつたのだ。木曜日には私はパリへ歸る。そこにお前や子供たちからのよい消息が來てゐることを期待してゐるよ。御機嫌よう。お前の最も忠實なる

V. B.

七八、妻へ

パリにて、一八六二、七、五

私のいとしい者よ

たつた今ロンドンから歸つて来たが、歸るとお前の手紙が二つ着いてゐたので、うれしかつたよ。第二のは火曜日の日附のさ。私は非常に健康だ。たゞあんまりねむいので、口をきくのもいやなくらゐるのさ。今日はこれだけ報告しておかう。ロンドン
はなか／＼面白かつた。しかしイギリスの大臣どもはプロイセンのことは日本や蒙古
のことよりも知つてゐないのさ。それに彼等はわが國の大臣連より頭がいゝとは思へ

ないね。御機嫌よう。お前の疲れてゐる

V. B,

七九、息子ヴィルヘルムへ

パリにて、一八六二、七、七

私のかはい、ビル坊よ

こなひだは手紙をどうもありがたう。お父さんはほんとうにうれしかつたよ。もつと早く返事をあげるところだつたが、お父さんは先週中はすつとイギリスに行つてゐたもんでね、それにそこではいろ／＼面白い物を見たので、息をつくひまもなかつたのさ。海上では大分風が出たのでね、婦人の人はみんな船に酔つちやつたのさ。男子でも酔つた人が大分ゐたが、お父さんは何ともなかつたよ。もう一日ぐらゐる船に乗つてゐたかつたくらゐさ。ロンドンでは工業博覽會だの、繪畫展覽會だの、それから犬や牛や馬や豚や羊や機械の博覽會もやつてゐたよ。お父さんの手ぐらゐりしかない犬がゐるかと思ふと、小馬ぐらゐの大きさのもゐるんだよ。生きてゐる腸詰に小さな鼻を

くつつけたやうな豚もゐたよ。その豚の脚はシガアの尖みたいでね、それでゐてとても太つてゐるので、眼も何も見えないくらゐなのさ。肉で出来たストロヴみたいで四角形の牡牛がゐるかと思ふと、象のやうな馬もゐるしね、それからいろ／＼の機械がブン／＼うなつたり、ガタ／＼と音を立てゝゐるのさ。みんな土を鋤いたり、刈り取つたり、鋸でひいたり、種を蒔いたり、穀物の穂をこいたり、煉瓦をこすつたりする機械なのさ。それから平な地面の上をレールなしに、氣のあらくなつた河馬のやうに走りまはつてゐる機關車なんかもあつたよ。しかし一番面白かつたのは何といつても、毎日十二時から二時まで公園で馬を乗りまはす大勢の婦人を見物したときだつたね。その人数はどうしても千人をこしてゐるがね、そのうちの少くとも六百人ぐらゐはお前のナディ(前出。シュテイグ)リッツ(リッツ男爵の養女)ぐらゐきれいな人なんだ。お前がもう十も年とつたら、見物に行つてごらん、そりやとても面白いもんだよ。

お父さんはハリー・アルニムと一しよに行つたんだが、ハリーは明日の朝こゝを立つてベルリンへ行くので、この手紙を一しよに持つて、もらふことにしたのさ。それ

からお祖母さまに、ブルンノフ男爵(ロンドン駐在)がたいへん親切にお祖母さまのことを尋ねて、よろしく申上げてくれといつてゐたと、お傳へしておくれ。お父さんはその人のところへ呼ばれて、美しいオペリンスキー公爵夫人やほかのペーターズブルクの人たちと一しよに御馳走になつたのさ。こつちへ歸るときにはお父さんはカール・フォン・ダルムシュタット大公夫人と一しよだつたが、その方はその息子とイギリスの公女アリスの結婚をすませて歸るところで、マ、によろしくといふことだつた。歸りの海は鷺鳥のお池のやうに静かなのさ。イギリスはバリよりずっと温かだがね。しかしお父さんがそこへ轉任にならなかつたのはほんとにありがたかつたね。さうマ、にお傳へしておくれ。何しろ家屋がどこへ行つてもたいへん小さくつて、不便なんだからね。お父さんやお前たちがどこへ陣どつてい、か見當がつかないくらゐなのさ。そりや家具とか、家の設備なんかはこのバリよりは新しい、便利なものがあるが、しかし子供や何かの住む場所がないんだよ。家の年とつた方や若い人たちにくれぐれもよろしくいつておくれ。マリー姉さんに、手紙はたしかに届いたと、いつておくれ。

神様のお恵みがお前たちみんなの上にあるやうに。お前の忠實なお父さん V. B.

八〇、妻へ

私のかはい、者よ。

昨日私は六週間の賜暇しあがをもらったのだが、ほんとに久しぶりでお前たちの團樂だんらくを楽しむために、早速お前のところへ急いで行かないといふのは、自分ながら妙な氣持だよ。しかし歸れたところでベルリンの旅館に釘づけになるか、それとも當地で山の空氣なり湖水の空氣なりを楽しむか、どつちかしかできないのだ。パリには今何にも用はない。私の關係する人たちは、みんな今、こゝにゐないのさ。私が賜暇せいかんを請願せいぐわんしたら、はじめには、その前にベルリンへやつて來いといふ返事が來たのさ。上司おかみのやることはみんなそんなものなんだ。そこで私は山と湖の空氣を吸つて來いと言はれてゐるし、將來大臣にさせられるとすれば、保養が一番必要なんだと返事したのさ。そ

こでバニエール・ド・ルツシオンへの賜暇旅行が許可される段取となつたんだ。ベルリンを微行^{びかう}で通して、そのついでにラインフェルトへこつそりと行くといふことを、私は押しきつてやるわけに行かない。上司に對する違背になるからね。それにシュトルプミュンデの方へでも、さうものなら、數週間の日子^{ひし}をつひやさないとベルリンに立ちよることはできないであらう。それに大使館の連中はみんな海水浴に行きたがつてゐて、ベルリンで休暇をつぶすのをいやがつてゐるんだ。それに私としても山へしぱらく行つてゐたら、健康の上にもいゝ効果があるだらうと思つてゐる。六週間たつたら、私もベルリンへ行くことにしておいたので、そのときはお前たちの無事な顔をまた見ることができよう。私は約三日のうちにボルドーを越えてバイヨンヌの方へ行き、ピレネー山に二三週間滞在してから、トゥールーズを通つて戻つて来るつもり——トゥルヴィーユかシュトルプミュンデで海水浴をやるために。私は老將軍の息子のノステイツツ^ツ（^ツ。プロイセンの外交官）と、多分ローエ^エ（^エ。フライヘル・フォン。パリ大使館附武官）をもつれて行くし、身の廻りのことなども御心配無用さ。さしあたり、フランス、バイヨンヌ局留

で手紙をよこしてもらひたい。そこから郵便を廻送させるが、そのうちルツシオン宛てにすることを知らせるはず。もうこのバリにやゐられないよ。何か變つた料理を食べないとやりきれない。劇場へ行つたつて熱いので、汗だくになるだけだし、用事はなし、知人もゐない。昨日エーブルト・ウンゲルンにちよつと會つたぐらゐさ。……私の氣持はバリの熱つくるしい埃^{ほこり}を見捨てることのできる満足とお前たちの顔をしばらく見られない心配とでひつぱりだ。しかしオテル・ロイヤール^{（ベルリンの旅館）}で碇泊^{ていぱく}するやうになるよりは、むしろこゝにゐてあくびをかみ殺してゐるよ。お前たちすべての上に神の御加護を祈りつゝ、心からの挨拶をおくる。お前の最も忠實なる

V. B.

八一、妻へ

私のかはい、者よ

トゥルヴィーユにて、一八六二、七、二〇

こゝで海水浴がやれるかどうかを見るために、當地へやつて来た。しかしとても退屈なところで、こんなところで二三週間を過ごすなどはとてもたへられさうもない。海濱でも海でも海岸の地勢でも申分はないが、フランス人のエゴイストチックな非社交性と來たら、家族でも一しよにつれて來ないと、とてもやりきれたものぢやないよ。てんぐが自分の妻とだけであらしてゐるのさ。メツテルニツヒ(有名なオーストリアの政治家。當時はフランス大使であつた)の一家は親類のお伴(とも)がたいへんなもので、六つぞろひ強の夫婦が、一つの大きな家に住んでゐるんだよ。そこでは晩は相當に面白いよ——お互ひに知つてゐる中へあかの他人が飛び込むので大したこともないがね。しかし終日てんぐが自分勝手な生活をしてゐるし、フランス人と定食の席へついてゐても、みんなカルトハウス修道院(ダンチ)にでもあるやうにおしだまつてゐるのさ。私の室にはソーファもなく海の眺望(てうぼう)でもなからうものなら、とても我慢(がまん)ができさうもない。今晚メツテルニツヒのところへ招かれなければこゝを立たうと思ふ。もし招かれたら、多分あす立つて、艦隊や甲鐵艦を見物するためにシエルブルの方へ行くか、或はバリへ戻り、その翌日南の方

へ行かうと思つてゐる。旅程(りよてい)をすつかり歩いてしまふかどうか、今のところまだわからないのさ。私ははげしいホームシックになつてゐるので、さしあたりどんなことにならうとも、ベルリン方面へのあらゆる氣がねなんか空吹く風と吹き飛ばして、お前たちのもとへ歸りたいのだ。美人で評判のプルトール伯爵夫人(プロイセンの外交官の夫人)といふ人が當地にゐるがね、會つてみてもひどく退屈な婦人で、義理にもほれ込むわけに行かないのさ。とにかく私は健康そのものでのんびりと潮風を吸ひ込んでゐるよ。しかしかういふ陰氣氣くさいフランス人の中にまじつてゐると、對話なんか忘れちまひさうだ。てんぐが相當に自惚(うぬぼれ)を持つてゐて、見おろされることを心配してゐるんだね。それでみんなそれぐ自分の鼻ばかり見てゐて、誰とも關係しようとしななのだよ。ペンがすべりが悪い。鋼鐵のやつだが、いやにひつかゝるのさ。さよなら、私の天使よ、バリへ戻るとお前からの手紙がついてゐるかも知れない。そりや明日になるが、もしシエルブルの方へ行くと、木曜日に受取れるわけだ。みんなによろしく。お前の最も忠實なる

八二、娘マリーへ

パリにて、一八六二、七、二三

私のかはい、子よ

十六日に出したお前の手紙、今日こゝへ戻つてみると来てゐたよ。いろ／＼とくはしく知らせて来てありがたう。マ、にはもうトゥルヴィーユから出した手紙で知らせておいたが、私は五六日こゝを留守にしたのだよ。一番初めに私は以前のハッツフェルト伯爵夫人、今のヴァランセエ夫人を訪れたんだがね。その夫人は當地から六マイルばかりの、セーヌ河の下流の美しい古い森の中に、澤山の野兎や山鳩や、三人のまだ年のゆかない娘さんたちと風變りな、古い館やかたに住んでゐるのさ。その館が彼女には現在の夫の宏壯くわうさうな邸宅より氣に入つてゐるらしいが、おほかた彼女はそこにゐて、以前パリにゐないときはその館で一しよにくらした最初の良人のことを偲しのぶのぢやなからうか。それから私は海の方へ向つたが、ノルマンディー一帯は非常に景色がいゝ。

まあ葡萄山ぶどうやまの代りに牧場のある、河の代りに海のあるライン沿岸地方といつたらよいだらうか。しかし朝、海水浴をすましてしまふと、暑い日のかん／＼照つてる中を、海岸の黄色が、つた白聖岩の間をぶらつき廻るよりほかに何もすることがなくなつちやつたのだよ。晩にはしかしハンガリーの貴婦人たちとちよつと氣轉かきかたのいる書方遊戯かきかたを遊ぶはめになつちまつたのさ。非常に七、めんどくさい遊戯でね、つまりあの連中のなまりをまねていふとセーア・アンアーンゲネエメ・ベシエフティグングなんだが、彼等はとても面白がつてゐるんだ。しかし私は、とてもしまひまで我慢できなかつたよ。それからオンフリオールの方へにげ出したんだが、こゝは森のあるガルダ湖北部（北に湖）とでも言ひたい、とても景色のいゝところさ。そこからセーヌ河の河口を渡つてアーヴルの方へ向つたんだがね、また雨が降り出したので、すぐ汽車に乗つて四時間よびでパリに着いたのだ。着いたはいゝが、へと／＼に疲れてゐたんで、大急ぎで蝦あひをあまり食べ過ぎてしまつたのさ。今夜はきつとよく眠れないかもしれない。

明日はまだこゝに仕事があるが、しかし明後日は金曜日だけれど多分ブローアの方へ

行き、途中シャンボールの城を見物し、土曜日にはアンボアーズ、シエノンソー、それからショーモンへ行き、日曜日にはボルドーへ行つて、マ、の大好きなラフィットやイーケム(共にボルドーの葡萄酒の種類)の葡萄の實が今年はどんな出来だか、よく見て来ようと思ふのさ。もつともこんな計畫もみんな神様の思召になつたらば、だよ。寸前尺魔すんぜんしゃくまの世の中だからね。クブーケンブルクへ行つて、そこが大層お前の氣に入り、あくる朝、食物の味も苦くはなかつたといふことだが、それは何よりだつた。それでもわかる通り、夕食にはあまり食べない方がいゝのだ——ダンスをしないときでもね。お前のところに飼つてあつたあの小鳥を射殺した小さなヴァリーつてのは、一體誰なんだ？クノスペンタールの家の少年こどもぢやないのかい？……お前の忠實なる父

V. B.

十九日日附のマ、の手紙がこゝにあるが、私は何もいら／＼なんかしてゐない——上着もズボンも作れない、當地の仕立屋にだけは別だがね——と傳へておくれ。

八三、妻へ

ニュルンベルクにて、一八六三、七、一九

私のかはい、者よ

この厚い手紙(この手紙ばかりではなく、ほかに同封したものがあつたのであらう)をこゝから送れるかどうか知らない。しかし丁度今あいてゐる時間を利用して、私が無事そくさい災だといふことをお前にお知らせする。私は昨日ベルリンを立つてドレーズデンへ行き、ボイスト(フリードリッヒ・フェルト。當時はザクセンの總理大臣)やランツァウ(前出)を訪問したが、みんなお前によろしく言つてゐた。(R伯爵夫人も同様) それからライプツヒには五時間ぐらゐしかゐなかつたが、非常によく眠れたよ。それから五時にこゝに着いたんだが、こゝでレーゲンスブルクの方へ行く列車を待つてゐるんだよ。そこへ行つて夜の十一時頃、國王陛下に御面謁ごめんぎやくをたまはるわけなんだ。ツイーテルマン(事判)が當地に私に會はせるためにいろんな人を呼びよせて、その目的のために一番いゝホテルをえらんでおいたのだ。ところでみんな私の會ひたくない連中なんぞね。そんなわけで私はわざとこれまでちつともいゝ印

象を興へてくれなかつた、別のホテルを取つたのさ。この紙よりい、紙はこのホテルにはないんだね。その上エンゲル(僕)は旅行鞆に洗ひたてのシャツを入れておかなかつたし、ほかの荷物は停車場へ置いて来たんで、私は汽車の埃(ほこり)にまみれたまゝで、くつろいだ気分にもなれないのさ。もうそろそろ夕食の時刻だが、食事もきつとひどいものだらうよ。カールスバートからこつちちつともお前からの消息がないが、きつと手紙がそこから廻送されて来ないためだと思ふ。とにかくみんな神のおめぐみで無事なんだらうね。ビルの誕生日には何をおくつてやらうかね？

旅行をしてゐると、私は気分がいゝ。しかしどのステーションへ行つても、まるで日本人でもみるやうに、ジロくみられるのは實にうるさいもんだ。私がいつかフラ・ヂアヴォロ(ナポリの強盗、一八〇六年に死)のやうに人のうはさにもものぼらなくなり、誰かほかの人間が一般の反感の對象になるといふ特徴をもつやうになるまでは、微行(ひかう)の楽しみなんかもう味(あじは)へなくなつたのだ。私は實はヴィーンを通つてザルツブルクへ行きたかつたのだ。そこには明日國王陛下がおいでになるんだが、さうやつて私は私

たちの新婚旅行をもう一度くりかへしてみたかつたのさ。しかし政治上の問題を考へて、私はやめにしてしまつた。私がそこにロシアの回答(ポーランド干渉(佛・英・奥)問題に關してのゴルチャコフの拒否的の回答)と一しよに到着しようものなら、私はどんな捏造(ねつぞう)説をあげせられたかもしれないからね。ガシュタインかザルツブルクへ行つたら、都合がいゝとレッヒベルク(オーストリア)に會へるだらう。お前からよろしく傳へておかうかね？

まだスープは來ないが、この邊でやめにしておかう。どうも鋼鐵ペンでこの紙にやあまり書きつゞけられないのさ。あんまり書いてゐると、指が痙攣(けいれん)して來るんでね。年寄(としより)の方や若い人たちへくれぐれもよろしく。お前の最も忠實なる

v. B.

八四、息子ヴィルヘルムへ

私の親愛なるビルよ

ヴィーンにて、一八六四、七、二九

お前の誕生日にこの數年來一度もお前と一しよにゐることができなかつたといふの

は、ほんとに残念だね。私たちがペーターズブルクに一しよにゐて、祝つたことがあるが、あれからこつち四年間といふものは、一度もさういふことはなかつた。昨年(丁度その時分、私はガシュタインにゐたし、一八六二年にはサン・セバスチアン(スペイン)にゐたし、一八六一年には、私の記憶がまちがつてゐなければ、コブレンツかバーデンにゐたんだね。ところで今度はこゝでデンマークの問題でいろ／＼頭を悩ませなきやならないのさ。暑さは暑し、仕事があとからあとからやつて来るし、全くまゐつてしまふよ。さういふわけで残念ながら遙かにお前の新しい歳に對して、神の祝福をお祈りするとしておかう。神がお前を心身ともすこやかにしてくださるやうに、そしてラインフェルトにゐるあらゆる家の者と一しよにお前に喜ばしい歳の初まりをあたへたまはんことを。私はこれからの旅程において何かあるい、物に出つくはすかもしれないが、それは今度あつたときお前にお土産として持ち歸らう。こゝからは送るのも厄介だし、それにあれやこれやと探してゐる暇もないのさ。

ガシュタインへ行つたら私は多分もつとおちつけるだらうと思つてゐる。そこへは

明日こゝを立つて行くつもり、それから約三週間のうちに國王陛下と御一しよにまた當地へ引き返し、こゝから多分また御一しよにバーデンへ行くだらう。それからお前たちを訪ねる時間ができるかどうかは、神様だけが御存じなのだ。とにかく私は少し休息することができたら、神様に深い感謝をさゝげるだらう。これからまたえらいデインナーに招かれて行くところだが、そこへ行きや面白くない話ばかりきくことだらうよ。さよなら、私のかはい、子供よ。お前のお母さま、お祖父さま、兄さん、姉さんにくれぐれもよろしく。お前の忠實なるお父さま

V. B.

八五、妻へ

ガシュタインにて、一八六五、八、一

私の十八年來のいとしい者よ

十三年前の今日(息子のヴァイルへ)はお前は大分むづかしい状態にあつたが、それからこつちといふもの私たち一家に大したさはりもなく無事にくらして來られたことに對

しては神に感謝しなければならぬし、過去における神のお恵みからして現在と未來とに對する信頼をくみとらなければならぬ。神がお前に完全なる健康を再びおあたへくださる、子供らにもそれをいつまでもおあたへくださるやうに。私は至つて丈夫だよ。だからお前も地下牢の人もつやうな心配は一切やめにしてもらひたいね。レーダンスブルクやザルツブルクのビールがうまいので、バンディング(嚴格な養生法)は一時お預りにしたが、こゝへ來てからまたやり出したのさ。日に七回、鑛泉にはひるんだよ。來週の今日は、神の思召にかなふならば、職務をちよつとお休みにして一日ザルツブルクへ行つてくるつもり、そこへは多分皇帝陛下もおいでになるはずだ。それから政治界の將來も、それと一しよに私自身の今後の計畫も多分いくらかはつきりして來ること、思ふ。いよ／＼ビアルリツツ(フランスの。一八六二年と一八六五年にビスマルクはこの地でナポレオン三世と會見した)へ行くことになつて、お前も一しよに行くやうになつたら、エンゲル(ビスマルクの從僕)がお伴をするから、お前の從僕は連れて行かないでもよろしい。しかしどうしても侍女を連れて行かないわけには行かないよ。それに禮装なんかもちやんとそろへて行かないと

いけないね。何しろお前は不運にも私のやうな人間の夫人なんでね、お前のことやお前のいでたちなども、とき／＼おせつかいな新聞に書き立てられるだらうからなんだよ。私的生活の自由をたのしめないといふのが、私のやうな地位にある者のみじめさといつてもいいだらう。それだから、プロイセンの總理大臣夫人としての顔にかゝるやうな儉約は決してやらないやうに、お前に警告しておくよ。世間の公衆といふものはお前の趣味とか財産とかは問題にしないで、お前の社會的位置に従つて、さういふ方面である標準をきめてかゝつてゐるのだよ。私たちは、いでたちに對する世間のかげ口よりも千ライヒスターラーぐらゐ高いものを身につけるやうにし、ひられてゐるのだ。それで田舎のつゞまやかな家婦の役割はもはやお前には許されてゐない、少くとも温泉場では許されてゐないのだ。マリーには一昨日手紙を出したが、くれ／＼もよろしく言つておくれ。電報をありがたう。お前の最も忠實なる

八六、妻へ

ジッヒロフにて、一八六六、七、一*

私のいとしい者よ

私たちは今日ライヒエンベルクを出發して、たつた今こゝに到着した。私たちが夜へかけてこゝにとゞまるか、それともトゥルナウにとまるかは、まだはつきりしない。これまでの旅は實にあぶなつかしい旅であつたが、何も事故がおこらなくて、ありがたかつた。オーストリア軍は昨日、もし騎兵部隊をライトメリッツからこちらへさし向けたとしたら、國王陛下も私たちもみんな捕虜にすることができたはずだ。氣の毒なことには馭者ぎよしゃのカールが栗毛の牝馬が倒れると一しよに自分も落つちてひどく體を打つたのだ。馬はにげてしまふし、彼は初めは死んだものと認定された。今はこジッヒロフ附近の野戦病院に行つてゐる。こゝから次の村だよ。クルトが彼の代りに來ることになつてゐる。どこへ行つても捕虜ほりよに出つくはすのさ。こゝにある報告によると今までもう一萬五千人以上になつてゐるさうだ。イッチンは昨日バヨンネットと共にわが軍から占領された。フランクフルトの師團なんだ。テュムプリング將軍

は腰部に重傷を負つたが、致命傷ちめいしやうぢやない。暑さはとてもひどくて、糧食の輸送も困難をきはめてゐるのさ。わが軍の將卒は疲労と飢ゑとですつかりまゐつてゐる。こゝまで來たところでは、ふみにじられた穀物畑のほかは戦争の痕跡こんせきなどどこにも見えななんだ。住民は兵隊をちつともこはがらず、妻子と一しよに日曜の晴着を着て扉の前に立ち、不思議さうに眺めてゐるのさ。トラウテナウでは住民どもが二十人の武裝をしてゐないオポーエ吹奏者すぶらうしやを殺したさうだ。彼らは自分たちの聯隊が進行してしまつてから、戦線のすつと背後のその地にとゞまつてゐたんだがね。犯人はグローガウの軍法會議に護送されたのさ。ミュンヒエングレツツではある火酒釀造者がわが軍の兵士二十六人を酒精窖けうへおびきよせて、へと／＼に酔はせしまひ、火を放つたといふことだ。その釀造所はある修道院のものなさうな。(兩方とも當時の流言蜚語であることがあとでわかつた)そんなこと以外にはこちらではこれまで一向珍しいことも耳にしない。ベルリンの方がよつぽどいろ／＼のことを聞くくらゐさ。今ゐる館やかたはローハン公の所屬で、その人は私がガシユタインにゐるとき毎年一二度ぐらゐ會つた人なんだ。

さよなら。子供たちや家へ来る皆さんにくれぐれもよろしく。神がお前たちすべてをお守りくださるやうに。お前の最も忠實なる

V. B.

* 普塊戦争はじまる。

八七、妻へ

イッチン(ギッチンではない)にて、一八六六、七、二

たつた今ジッヒロフから當地へ着。こゝへ来るまでの戦場にはまだ死骸や馬や武器がどこにもごろ／＼してゐた。わが國の勝利は私たちが考へてゐたよりすつとすばらしいのさ。今までのところでオーストリア軍の捕虜は一萬五千人以上らしいし、死傷者はすつと多く、二萬人をくだらないだらうと見つもられてゐる。敵の二軍團はすつかり粉碎ふんさいされてしまひ、數箇聯隊は最後の一兵までもやられてしまつたのだ。私の見て来たところでは、プロイセンの兵隊よりはオーストリアの捕虜の方がすつと多いんだね。急使にいひつけてどし／＼シガーを、できるなら毎回千本づゝ送り届けておく

れ。千本で二十ライヒスターラーぐらゐすると思ふが、みんな野戦病院へもつてつてやるのだ。負傷者はみんな私にそれをせがむんでね。それから後援會の手を通すか、家の費用で、野戦病院宛てのクロイツ新聞を數ダースほど豫約してもらひたいね。例へばライヒエンベルクの野戦病院だの、それから、いや、野戦病院のほかの地名は軍務省に照會せうかいしてきいてもらひたい。クレールモン・トネール(代議士)はどうしてゐるかね？ 家へは見えないかね？ これまで何の知らせもないんでね。……
御機嫌よう。何かフランスの小説を一冊送つてもらひたい。一冊でいゝから早く。神がお前をお守りくださるやうに。お前の最も忠實なる

V. B.

八八、妻へ

電報

ホン・タ・ムッソン、一八七〇、八、一七*

ヘルバートとビルに只今面會。ビルの乗馬は射殺されたが、彼自身は無事健在。へ

ルバートは腰部に銃創を受けたが、骨は碎かれず、生命に別状なし。彼は今夜私のもとに送られて来るはず。それから彼をナウハイムに送らせる。そこでお前は會へるだらう。フィリップ(ビスマルクの兄の長男)は健在。

ビスマルク。

* 普佛戦争始まる。

八九、妻へ

ホン・タ・ムツソンにて、一八七〇、八、一七

私のペットよ

主要なことは電報で知らした。今朝三時警報によつて呼びさまされ、吾々は四マイルばかり車行し、騎行したが、そこで偶然龍騎兵第二聯隊が多大の損害を受けたことを聞き、さらに二マイルほど野つ原を横切つて行つたのさ。途中で始終探りのために尋問をやつて行つたが、大して危険なこともなかつたが、ある小作農場へ行つてみると二百五十人の負傷者のうちにヘルバートがゐたんだよ。そこへ新しい馬を一頭ちゆうばつ徴發

するといふ口實の下にビルも見舞ひに来てゐたのさ。ところが彼が實際みつけたのは一頭のやせたやくざ馬だつたんだね。ヘルバートはスツェルダヘリー(龍騎兵第二聯隊)ともう一人の士官——名前をつい、忘れたが——のそばに横たはつてゐて、顔色もいつもと一向變つてゐなかつた。たゞ腰部に弾丸の傷口と出口とで二つ穴があいてゐたが、十分にはた縋はりたされてゐたよ。私は馬車をよこすやうに言ひ送つたが、それがやつて来るのを待つために四時間もそこに留まつた。それで馬車がやつて来たときには、彼はひどい暑さのなかに坐つてゐるのが苦しうだつたがね。私は彼のところへ官房小使のクリューガーを残しておき、横臥馬車を要求しておいたから、彼は今夜涼しくなつてからこちらへやつて来ることができるよ。彼はほかになほ二ヶ所、軍服をかすめた銃創を受けたが、その一つは、私のやつた黒い木製時計を碎いてすべつて行つたんだ。私はそれを取つて、その代りに私がサン・ダヴォールで買った十フラン時計をやつて来たよ。黒い方は記念としてお前のお土産みやげにしようし、私は當地で新しいのを一つ買ふつもりさ。ビルの馬は突進の際に射殺されたので、彼はまつさかさまに落つこ

ちたが、はじめは戦死した事になつてゐたんだね。彼はしかし相變らず太つてゐて
すこぶる元氣、たゞし顔などはうす汚きたなくよごれてゐたよ。ヘルバートの方はこれで
軍役には服することはできない。神がいかなる不幸をも降くだされない以上、五六週間も
養生してゐたら快癒くわいゆするだらう。私は彼をすぐ汽車にのせてドイツへ送りかへしてや
らうと思つてゐるよ。お前がナウハイムへ來て看護してやつたら、彼もどんなによろ
こぶことだらう。彼が鐵十字勳章をもらへないやうだつたら、私は今後決して勳章な
んか身につけないつもりさ。ヴェスデーレン、ヴェスタルプ、ロイス、クライストは
戦死したのだ。アウエルスブルトは下腹部に銃創を受けて、重傷だ、やはり同じとこ
ろにねてゐたよ。突貫した第三騎兵中隊は十二名の士官を失ひ、兵士の方はまだわか
らないんだ。輕騎兵第三分隊と槍騎兵第十三及び第十六分隊と私の氣の毒な黄色甲騎
兵とは、フォイクト・レーツ(プロイセの將軍)の命令したところの無意義な、無謀な騎兵突貫
に際して兵士の半數と士官の半數以上を失つてしまつたわけさ。神が私の兩兒を恵み
ぶかくもお助けくだすつたので、私はこのことに關して憤慨ふんがいするのをひかへようと思

ふが、しかし第一軍及び第二軍の指揮といふものはわれ／＼の兵士の決死の勇氣を濫あふ
用した點において、腕力一方で頭腦あたまがなかつたと言はれても仕方がない。が、しかし
われ／＼はそれでも勝つのだよ。ところでわれ／＼はこれからはバリへ攻めよせよ
うとしてゐるのだが、これまで失つた數だけの兵は、特に士官の方は、われ／＼に残
されてゐないのだ。これはヨーロッパの最優秀の兵士の浪費といはねばなるまいよ。
モルトケはえらいが、シュタインメツ(プロイセの將軍)の方は將軍の器うつはぢやないな。わが軍
は昨日二倍以上の兵力、有利なる陣地、優秀なる銃器及び勇敢なる兵士に對してぶつ
かつて行つたが、それでも勝利をえたんだよ。さよなら、私のいとしい者よ、マリー
を抱擁しておくれ、それから何も心配しないやうに。お前の
V. B.
ビストルはよく、馬は健在。しかし私は疲れてゐる、死んだやうに疲れてゐる。三
時から八時まで馬に乗りづめ。

九〇、妻へ

ヴァンドレックスにて、一八七〇、九、三

私のかはい、者よ

一昨日夜明前に私は當地の私の陣營を出て、今日戻つたが、その間に一日におけるセダンの戦を経験したんだよ。その戦ではわが軍は約三萬人を捕虜となし、パール・ド・デュックの戦以來わが軍が追及してゐたところのフランス軍の殘餘を要塞に追ひ込めるに至つたが、そこで彼等は皇帝と共に捕虜として降服しなければならなかつたのさ。午前一時までモルトケやフランスの將官たちの降服の締結について審議を重ねてから、私の知つてゐる將軍レイユがナポレオンが私に面會することを望んでゐる、といふことを私に言ひに來たんだね。私は顔も洗はず、朝食もした、めずにセダンに向つて馬を走らせたが、セダンの近くの國道で、三人の屬官に扈從されてゐる皇帝が、ほろなしの馬車——その側には馬に乗つてゐる三人の屬官が立つてゐた——に乗つて、停車させてゐるのを見出したのさ。私は馬から下りて、テュルリー宮殿(パリ。一八七一)で會見したときと同じやうに鄭重に御挨拶申上げ、何を申出でようと言われてゐるか尋

ねてみた。皇帝は王(プロイセン王)に會見したいと望まれるので、私は、陛下はこゝから三マイルばかりある、私が今手紙を書いてゐる町に本營を持つてをられたのですといふことをありのまゝにお答へしたのさ。自分はどこへ赴いたらいいのかといふお尋ねに應じて、何分にも土地不案内のことゆゑ、セダンに近い、マース河畔の小さな町なるドンシュリーにある私の營舎においてを願ひたいと私はお答へした。皇帝はそれを受納され、彼の六人のフランス士官、私及びかれこれするうちに馬で私に追ひつたカールに隨伴されて、人通りのない朝の往來を通つて、わが軍の陣地の方へやつて來られたのさ。町の近くへ來ると、さぞかし物見高い人がやつて來ようと考へられて、そゞろに心細くなられたのであらう、道のはとりにぼつねんと立つてゐる勞働者の家にしばし休むことはできないかと、私にお問ひになるのだ。私はカールに命じてその家を檢分せしめると、彼はいかにもみすばらしい、むさいところだと、戻つて來て報告したが、ナポレオンは「構はぬ」と言はれるのであつた。そこで私は彼と連れ立つてくづれかゝつた狭い階段をのぼつて行つて、一脚の唐檜のテーブルと葦で作つた

椅子が二脚ある十フィート平方の室の中にはひつて一時間ばかりそこにをつたが、他の者は下の室に待つてをつたのさ。六八年のテュルリー宮殿における私たちの最近の會見と何たる對照ぞやと、言ひたくなるところさ。私たちの談判はなか／＼面倒だつた。とにかく私としては、神の大いなるみ手のもとに投げ倒された人の心を痛めるやうなことは、なるべくふれたくなかつたのでね。私はカールに命じて市から士官を呼んで來させ、モルトケにも來てもらふやうにことづてたが、やがてやつて來た士官の一人を偵察に出すと、こゝから半マイルばかりのフレーアといふところに庭園のついた小さな館を發見したといふ報告が持つて來られたんだ。そこへ私は、その間に召集された近衛甲騎兵聯隊の護衛兵と一しよに皇帝のお伴をして行つたのさ。そこで私たちはフランスのヴィンブエン中將と降服の諸條件を締結したが、それによると四萬乃至六萬のフランス兵が——はつきりした數はまだよくわからないが——銃器彈藥もろともにわが軍の捕虜となつたのだよ。一昨日と昨日とでフランスは十萬人の將兵と一人の皇帝とを失つたのだ。今朝皇帝は彼の廷臣、馬、馬車と一しよにカッセル附近の

ヴィルヘルムスヒエーエへ向けて出發されたんだ。

實にこの勝利たるや世界的の事件であり、それに對して我々は主なる神にうやうやしく感謝しようと思ふのだ。この勝利によつて、たとへ我々は皇帝を失へるフランスに對してなほ戦ひつゞけねばならないとはいへ、戦争は決定されたわけなのさ。

私は筆を擱かなければならない。今日お前とマリーの手紙でヘルバートがお前たちのもとへ到着した旨を知り、心からのよろこびを感じたよ。ビルには、もう電報で知らしたやうに、昨日會つたよ。私は陛下の御面前で馬からおりた彼を抱擁したのさ。たゞし彼は隊伍からはなれずに氣をつけの姿勢をしてゐたがね。彼は丈夫で、元氣だよ。ハンスとフリッツ・カールにも會つた。龍騎兵第二聯隊にゐるビューロウ家の兩人も健在、無事。

さよなら、私のかはいゝものよ。子供たちへよろしく。お前の

V. B.

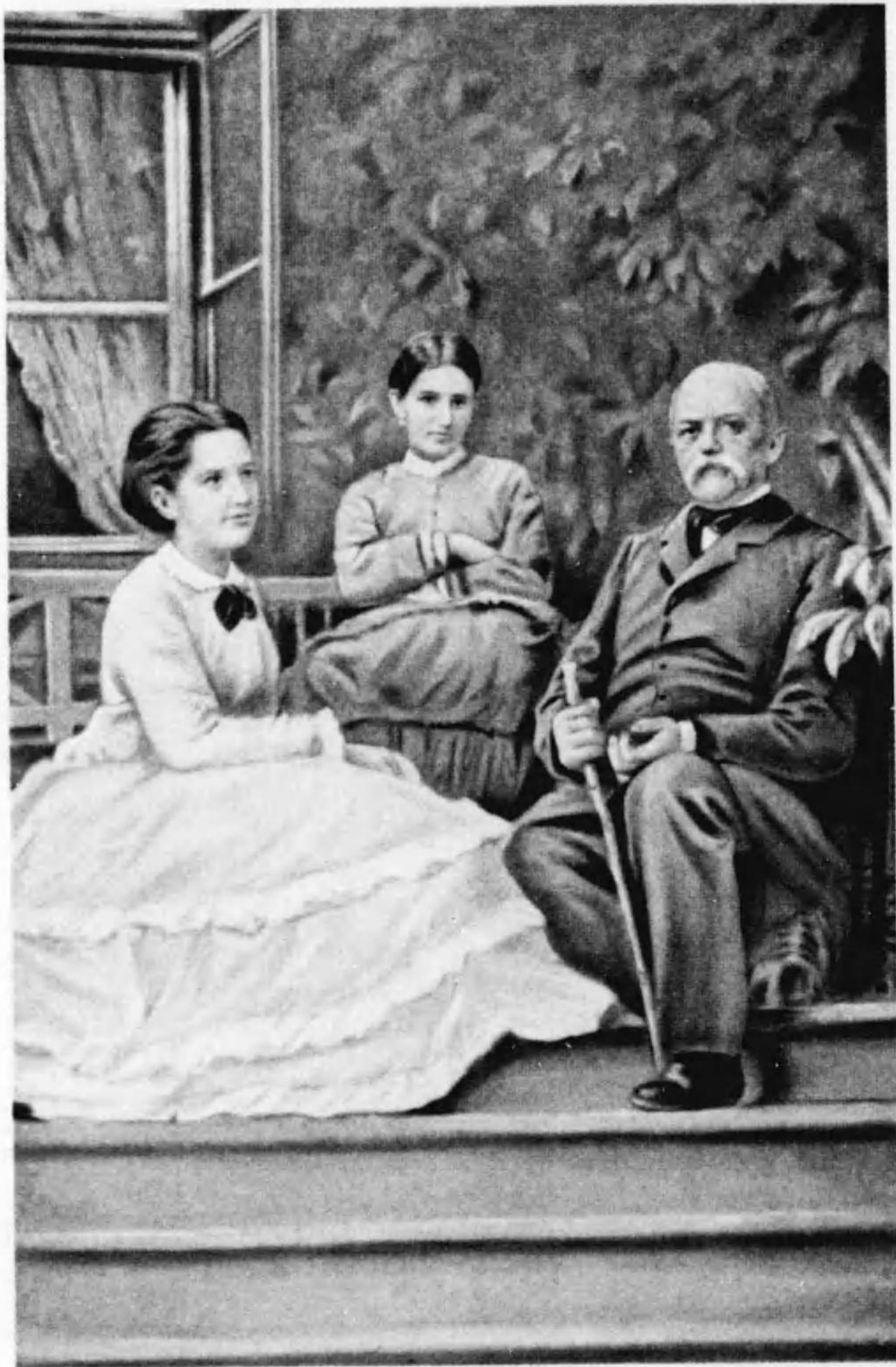
九一、息子ヘルバートへ

ファリエールにて、一八七〇、九、二三

八年前の今日、たしか私は大臣となつたのである。

私の親愛なる息子よ

今日、十五日及び十六日日附の母上よりの手紙二通、落手したが、それで見るとお前の負傷は依然としてあまりよくないやうだね。お前は病苦のために苦しい一年を送るであらうが、それでも私は神がお前をそのやうに、八月十六日の聯隊の騎兵突撃より生きのびさせてくださったことに對して、神の御加護を深く感謝しないではゐられない。われ／＼はそれに參加したのですと物語ることは多くの人々に恵まれなかつたからだ。お前の脚部は神のお助けによつて恐らくかたくなつてしまふやうなことはなからうが、運動の方はかなり長い間自由にはゆかないであらう——といふのが軍醫たちの意見だよ。筋肉の裂創があまり大きいので、新整形と新しい筋の運動習練とが緩慢に行はれるわけである。ローン(プロイセンの軍務卿)の負傷は軽い方だつた。それだから私たちは、神様がおゆるしくくださるなら、これからもヴァルチンの森を度々一しよに乗り



妻夫クルマスビだいろつくに莊別のンチル ヲヴ年〇七八一
(端左) ネー ヲヅルマ妹と

まはすことができるだらう。……

ヴィルヘルムスヒエーエ(ナポレオン三世が捕はれたの身)としてこの地に幽閉された)についての憤慨は私にもわかるよ。庖厨方、既方及び僕婢はすべて國王の意志に反してベルリンからさし送られたので、ナポレオンはこれまで自分の使つてゐた者をやめさせたり、賣つたりして、金にしてお残しになつたのさ。それはともかく、ナポレオンを優遇することはわれ／＼にとつては得策なので、私としてはその點に多大の注意を拂つてゐるのだよ。復讐は神にお任せすればよいのだ。フランス人には、彼等が再び皇帝を取返せるかどうか、わからないやうにしておく必要がある。彼等を離間せしめるには、それに限るのさ。彼等を結合させて吾々に當らしめるやうに仕向けるなんて法はないではないか。……

私はこの地でフランス人の委員達(ファール等)とこれで三度も數時間にわたる會議をやつたが、彼等はエルザス問題については依然として難色を示すので、相談はいつも決裂に終るのだ。シュトラースブルクを彼等にゆるしてやるなら、彼等は五十億フランを支拂ふことができると思つてゐるやうだし、その覺悟もついてゐるやうだ。

しかし私は彼等に、金のことはむしろあとの問題としたい、その前にわれ／＼はドイツの國境をしっかりと決定したいのだと、言つてやつたのさ。といふのは、國力が回復しなへすれば、彼等は再びわれ／＼を攻撃するやうになるだらうと、私が言ふと、彼等は大きな平和主義的の誓言でもつてしきりにそれを打消したものだ。とにかくこれまではすべてさうだつた。しかしこれまでなかつたやうな體制をつくり出すことこそ迅速にして完全な救済の道でなければならぬ。さういふ救済が神によつてくだされることを私は同時にお前のためにもお祈りしてゐるよ。マ、とマリーにくれ／＼もよろしく。お前の忠實なる父

V. B.

九二、ドウ・ボア・レイモン*

ヴェルサイユにて、一八七〇、一〇、六

敬愛する總長殿

貴下が戦争勃發に際して、偉大なる國民的闘争に對するわが國の大學の精神的同感

を表白されたところの演説を御親切にもお送りくださったことに對して、私は、貴下が豫言者のやうに言ひあてられた宏大な成功が得られた今において始めて、私の感謝を申上げることができなのです。貴下の深遠にかつ痛切なる御言説は必ずや、それを傾聴せるドイツの青年學徒ならびに彼等の同感者の何びとにも多大な印象を與へたこと、信じてゐます。さらに私の特によろこびとするところは、貴下の御演説の効果が遙にドイツの國境を越えて波及し、特にそれが的確なる翻譯によつて普及されたイギリスにおいて、外國の攻撃と横暴とに對する大いなる道德的な、かつ國民的な奮起としてのわれ／＼の闘争の意義を明かにし、かつ基礎づける上にあづかつて力あつたことを、各方面の情報によつて知りえたことでありませう。

閣下に私の最も正直なる尊敬を呈することをゆるしたまへ。

* ベルリン大學總長

九三、妻へ

ヴェルサイユにて、一八七〇、一〇、二八——二九

私のベットよ

もう十二時は過ぎてゐるのだ。たつた今、早朝から續けられてゐる評議——有益にして馬鹿らしい評議をかたづけたところ。昨日もお前宛てにメッツの戦果についての電報を送つたが、しかし明日は飛脚が立つ時分には起きられさうもないから、今日中に一つ、私がバリ砲撃の開始に邪魔を入れてゐるとか、その結果戦争を長引かせる罪は私にあるとかといふ、お前にも知らしたが、いろ／＼の新聞に書き立てられてゐるはさに對する私の憤慨を書きつけずにはゐられないのさ。數週間以來、毎朝私は砲聲によつて呼びさまされることを希望してゐたんだ。二百門以上の大砲はもう配置されてゐるんだが、發砲はまだ始まらないんだね。バリなんかまだなか／＼のことで、わづかに三四の要塞を目標にして發砲されてゐるといふ話なんだ。……とにかく世人は戦争をのぼす責任は私一人にある、それがために多くの名譽ある兵士は犠牲にされねばならないのだと主張するのだね——結局さういふ議論の目的とするところは、い

はゆる『文明』の擁護をたてにとつて外國の賞讃を博せんとするにほかならないのさ。どうか、そんな嘘を信する者がゐたら、誰でもかまはないから、どし／＼と反駁してやつてもらひたいし、子供たちにもよろしくその旨を傳へておくれ。……

お前の V. B.

九四、リーヒャルト・ブークナーへ*

ヴェルサイユ、一八七二、二、二一

尊敬する君へ

貴下がドイツ軍に一つの詩を獻じたること、さらに貴下がそれを私の手もとに送りとゞけられたことに對して、貴下に感謝いたします。貴下はこの祖國的な詩を私一人を目標としてお作りになつたといふことで、非常な光榮として恐縮に存するわけでありませんが、これが公表されるに至ることを、また非常なよろこびを以て期待してゐる次第です。

貴下のこれまでの御制作に對しては、私は以前から、——時には反對な氣分を持つたこともありすが——とにかく多大な關心をさし向けてゐたのでありますが、その御制作も酷烈なる鬭争のうちにパリ人の抵抗を超越したのです。私は御制作の上になほ、國の内外において、完全なる勝利が與へられるであらうことを信じかつこひねがふ者であります。

* 有名なドイツの樂劇家(一八一三—一八八三)

九五、妻へ

ヴェルサイユにて、一八七二、二、二七

私のかはい、ものよ

お前は毎日忠實に手紙をくれるが、私の方は大分怠慢だつた。エンゲル(ビスマルクの從僕)がお前の手紙をベットへ持つて来る度毎に、後悔の念に責められて、今度こそはといふ決心をするのであつた。しかしこの頃は毎日同じやうなことばかりで、毎日六七時間

はティエール及びフアーヴル(共にフランス)の媾和委員)と首つ引き。私の背の小さな友達のティエールはなか／＼才覺に富んでゐるし、愛想もいゝが、決して談判なんかに向く事務家ぢやない。思想の泡がキルクを抜いた塊からのやうにとめどなしに彼の内部から湧き出て来るが、肝心の飲料をなか／＼飲ませないので、むれつたくて仕方がないのさ。それでゐて背は低い、なか／＼しつかりしてゐるし、白髪頭の、上品な風采で、フランス古來の儀禮はちやんと心得てゐるんだね。どうも行きが、りですゐぶん手きびしい談判をしなけりやならないんだが、どうもこの男に會ふとやりにく、なるのさ。悪漢どもそれを心得てゐて、あゝいふ苦手を私に押しつけたに違ひないんだね。昨日やつと署名がすんで、結果としては私一個の政治上の打算以上を獲得したつもりさ。しかし政府の方にも民衆の方にもいろ／＼の氣分が支配してゐるだらうから、一々さういふことに氣を配るのはなか／＼厄介な話だよ。われ／＼の方ではエルザスとドイツ・ロートリンゲンをかへしてもらひ、それに統治の方からいふとかなり面倒なメツツと十三億ターラーを取り立てるのだ。ところで最後の難點はかういふ條件をポルド

「へ持つて行つて七百人も頭数のある集會で通過させるといふことなんだ。しかし神はその強きみ手をもつてわれ／＼をこゝまでお導きくださったのだから、平和をもわれわれのためにしつかりと堅めてくださるであらう。その平和のためには、フランスにおける多くの不逞の徒と共に、わが國の——また敵國の——非常に多くの人々が戦死し、不具となり、喪に服してゐることを、考へずにはゐられないのだ。私の心情は謙遜なる感謝でいつぱいになつてゐる、そして私はお前の二人の青眼の子供と一しよに間もなくお前のところへ歸れることを楽しみにしてゐるよ——約二週間のうちに。神が私たちを守り、一日も早き再會を私たちに與へられんことを。入城(巴里)についてはもはや心配すべき危険はない。どこにおいても神はお守りくださるのだ。誰よりも先にマリーとお前の忠實なる慰め人アイゼンデッヒャー夫人とにくれ／＼もよろしく。お前の

V. B.

九六、妻へ

私のかはいゝものよ

ヴェルサイユにて、一八七一、三、五

このみすばらしい小部屋にはひり込んでから、今日で丁度五ヶ月になるよ。神のお助けで明日こゝを出發できるやうに、今日とりきめるはず。……パリ人に對するお前の心配は結局杞憂だつたよ。私は水曜日ゴルドンと一しよにマイヨー門を通して馬を走らせたが、凱旋門のところまで引き返した。陛下のお通りになる前に、私は通るわけには行かなかつたから。それからヴルテンスレーベンと二人だけで戻つて來たが、どこを通つても私といふことがわかつたので、口笛で敵意をあらはす者も少しはゐたよ。しかし大てい小さな少年だつた。暗殺者なんか影も形もないよ。……週末にならないうちに多分お前たちのところへ歸れよう。お前の最も忠實なる

V. B.

九七、妻へ

ザールブリュッケンにて、一八七一、三、八

電報

只今ザールブリュッケン着、木曜日朝急行列車でアンハルター停車場着の豫定。

九八、皇帝ヴィルヘルム一世へ

ベルリンにて、一八七一、六、一一

陛下におかれましては、昨日の御勅旨によつて、すでに先頃おそれ多くも口づから私にお傳へくたされましたところのまことにありがたき御思召を御證明くださいました。私は私のうや／＼しき感謝を繰返し玉座の下に呈しつゝ、私は、特にこの光榮身にあまる御賜物を下しおられましたについて、陛下が親しくかつ王室の御名においておそれ多くも私の奉仕に對して賜はれる御認定を拜し、恐悦至極に存じ奉るのです。陛下の御満足は私の心情のおほけなくも渴望してやまないと存じてありまして、私自身今次の成功をよろこびうるためには、どうしてもそれを缺くことはできないのでございます。先祖代々私に至るまでも御高恩を受けましたところの王室に對する、忠節

と奉公の念とは、また私の子孫の遺産たらしめる覺悟でござります。頽廢と懷疑とのこの時代において、神の祝福は一にかゝつてその精神に存するからであります。私は理智の考慮にして十分なる力として役立たない場合には、いつもその精神において決心の原動力を見出したのであります。陛下より下しおかれまする所有(ラウエンブルクの村落フリードリッヒス)は、その性質より申さば私の夢の理想であり、一つの美しい森であります。しかし到達しがたきものではなく、それを御聖恩にのみ負ひうることは、ひそかに私の誇とし、よろこびとして感じてゐるところでござります。ザクセンの森において私の後におきましても、陛下に對する彼等の感謝を皇帝(プロイセン王は同時に)及び帝國に對する奉公において證明するであらうところの、忠節なるブランデンブルク人の世代が永く／＼續くであらうといふ、神への信賴を持つてゐるのでござります。時に二豎の虜となりて政務を怠ることがございしても、なにとぞ御寛大なる叡慮を下しおかれんことをこひねがふものでございます。數ヶ月の休息の後には、私は陛下に仕へる健康なる僕として再び咫尺しうることを希望いたしてをるのでございます。

九九、妻へ

ヴァルチンにて、一八七二、五、二六、トリニターリスの日^{**}

お前たちが行つてしまつて、さびしくて仕方がない。四週間我慢ができるかどうか
わからないから私は心配してゐるのさ。多分私は、明日ヴェストファール<sup>(ヴァルチンの
の森林監督)</sup>と一しよにラインフェルトへ行く。しかし人のゐない家に戻るといふのは、
氣の重くなくなるものでね。私はブッヒャー<sup>(選舉監
督官)</sup>と一しよに教會に行き、それから二時間
といふもの植樹林のなかでうとくとくらし、ヴェストファール及びヴィステイング
ハウゼン<sup>(森林
官)</sup>と一しよに食事をした。丁度三時間といふもの、足に保養をさせてや
つたが、そのうち太陽が沈んで行つたのさ。天氣もよく、森もたいへん美しかった。
しかし良心も何もない醫師たちがいやにもつた、いふつたことをぬかしをつて温泉浴で
もつて家族の羈絆^{きんぱん}をばらばらに引き裂くとすれば、美しいヴァルチンも私には何の役
にも立たないんだ。私はあらゆる人間が死んでしまつて、私ひとり取りのこされたや

うな氣持なんだ。多分お前たちは無事についたと思ふ。S. M. 宛ての手紙は渡してく
れたらうね？ 私のかはい、腕白坊^{わんぱく}やによろしく。早く子供たちの一人をこちらへよ
こしておくれ。お前の
V. B.

* 一八七二年はいはゆる『文化闘争』(一八七二—八六)(略年譜参照)のはじまつた年である。

** 聖靈降臨祭後の最初の日曜日。

一〇〇、妻へ

ヴァルチンにて、一八七二、五、三一

電報

私は子供のない一時やもめがい、お天氣の日に有卦^{うけ}にいつてるやうに、至極無事さ。

ビスマルク

私のかはい、者よ、電報で知らしたやうに私は無事でくらししてゐるよ、體の方はペルリンにゐたときからみるとずっと工合がい。私は長時間は眠らないが、十分に眠ることができるのだ。胆汁がおちついてゐるし、(立腹などし) (ないの意) それに肉體的に疲勞して床につくからだと思ふ。國王陛下にはいつも天氣には恵まれていらつしやるのだが、昨日も丁度觀兵式(お前の小さな毛皮を軍服の下へつけて行つたので、たいへん助かつたよ)が四時間もつづいたが、その間温かだつたし、雨もなく、日光まで出てゐたよ。三時にはフォン・オルデンプルク公のもとで朝食、六時には元帥の宴會、夜は奉祝演劇へ行つてみた。非常に華やかなバレエで、出し物はファラオーの娘、舞臺裝飾は立派だし、きれいな踊り子が大勢ゐたのさ。十一時頃人いきれでムツとするやうな劇場からのがれて、お前のなつかしい手紙を読んでからすぐに床についた。八時にやつと目がさめたが、しかし十時までウト／＼やつてゐた。それから玉子を四つ食べて、兩皇帝陛下に謁見、それが一時間ばかりかゝつたが、またもせいたくなく朝食、まるで晝

食みたいで四本の葡萄酒と温かい食事が四皿出たよ。少し前に私は島の方へ出かけてみようと思つたが、しかし雨があんまりひどいのでやめにした。四時にはしかしツァルスコーエの方へピクニックがあるのさ。ヘルバート(外交官として)はモスクワにゐるので、私は昨日、觀兵式三日間の賜暇をお願いしてお許しが出たので、會ひに行くつもり。きつと彼がそこからお前に手紙でいろ／＼知らすこと、思ふ。あそこも當地のやうに天氣がよければい、が、寒いといふのぢやないが、何となくじめ／＼してゐる。こゝではたくさんの舊知人に會つたが、みんないろ／＼お前のことを尋ねて、とき／＼私をまごつかせるのさ。私は自分がおぼえられるより以上に一萬人も多くの人を見知つてゐるが、しかし誰かある人にあなたは丁度そのなかの一人ですよといふのはむづかしいものさ。私はさういふ人たちに『私のプリンス』と呼びかけて、バーデンで會つて以來だといつてやると、丁寧に『いや、そりや六十七年のパリでしたよ』など、いふのさ。ところで次の日になると、私は忘れてしまつて同じことをやるので、先生たち、『あの男もそろ／＼燒きがまはつたな』など、考へるのだ。私はしかしどうするわけに

も行かない。記憶力がすっかりなくなつたんだね。その意味で彼等のさう考へるのも當然かもしれない。とにかく當地の人ぐらゐお愛想がよく、客あしらひのうまい人はほかにはさうゐないだらうよ。國王陛下はこゝへいらしつてもやはり氣受けがよろしい。それでもロシア人はあの方は國王としては少し如才じよさいなさ過ぎると考へてゐるらしい。陛下がまじめになられると、『あの方はツァー（ロシア）のやうな顔をなさるね』などとやつてゐるのさ。

私は別に何も不平をいふ種もない。政治上のこともちやんと行つてゐる。しかし私はお前たちのことを考へて恐ろしいホームシックにかゝつてゐる。長く別々にゐる習慣を近來はめづらしく忘れてゐたんでね。その上御滞在が七日以後までのびるといふ話もちやがつてゐるんだ。多分帝國議會ではものすごい勢ひで私の出席を求めてゐること、思ふ。今までのところはしかし私が出席しなくてもちやんと行つてゐるやうだ。ズルトゥル（犬の）だけはさうは行くまい。私はちき歸つて來ると話してやつておくれ。子供たちにくれぐれもよろしく。お前の

V. B.

土曜日。今日ツァルスコエで晝食。そこでテオドル（フオン・ビスマルクのボーレン・子の）の死の電報受取つた。フリッツ（テオドルの息子、フリードリッヒ）に心からお悔くやみを傳へてもらひたい。

一日附のお前の手紙、たゞ今落手。

* 一八七三年四月二十七日から五月八日までビスマルクは皇帝ヴィルヘルム一世に隨行して、ロシア皇帝アレキサンダー二世をペーターズブルクに訪問した。

一〇二、息子ヴィルヘルムへ

ヴァルチンにて、一八七五、七、二九

私のかはい、息子よ

ひどく私も筆不精ふしやうになつたが、今日はその習慣を克服こくふくして、お前の新しい歳としにまで神の豊かなる祝福を祈り、何よりもまづ二十三歳の青年にふさはしいやうな健康を祈らうと思ふのだ。まづ第一にマリエンバートの温泉が十分の効果を示すであらうこと

をお祈りしよう。神のお助けが常にお前と共にあつて、病氣(風)を完全に退散せしめてくださるやうに。私はまあ〜といふところさ。いくらか風邪氣味で體がだるく、昨年キツシゲン(水)を飲んでゐたときのやうに、馬に乗ることもできない。それでゐてしかし少しづつ、やせて来て、この分でゆけば政治にだん〜冷淡になつてゆけるだけは、拾ひ物といつてもいい、かもしれないよ。

私はお前の誕生日にピストルを一對祝つてあげようと思つてゐる。お前のお母さまはそんな物をあぶながつておいでだが、私はお前が弾丸をこめるとき十分用心してそれを取扱ひ、たゞ射的にだけ利用するなら、大丈夫だと思つてゐるのさ。私はそれを探し出すわけに行かないので、お前がそこで氣に入つたのをみつけるとい、射ち工合のい、射的用ピストルだよ。二十フリードリッヒスドルぐらゐなものならよからう。温泉用の戸棚も上げようと思つてゐる。お母さまからまだ頂いてないなら。

さよなら、私のかはい、息子よ、早く丈夫になつてこちらへ戻つておいで。お前の忠實なる父より。

一〇三、トーマス・カーライル*

ベルリンにて、一八七五、一二、二

謹啓。貴下の第八十回の誕生日の祝祭はドイツにおいても祝はれねばなりません。

その事を私は私の母國語においてあへて申し上げます。貴下が貴下の同國人にシラーを御紹介なすつたやうに、貴下はドイツ人にわが國の偉大なるプロイセン王(フリードリ)をその完全な姿において、生ける立像のやうに描寫してくださいました。貴下が曾て『英雄的なる』文學者について、彼は眞實であらねばならない高貴なる義務の下におかれてあると語られたことは、貴下御自身において十分に證明されたのであります。しかし貴下が當時論評されたところの、それらの文學者よりもより幸福に、貴下は創造されたものをおよろこびになり、今後もさらに、神が貴下にこれからも長くおあたへになるであらうところの、豊かなる力において創作されんことを冀望してやみません。

私の心からの祝意と共に私の正直なる尊敬をお受けくださらんことを。

侯爵 フォン・ビスマルク

* 有名なイギリスの文學者。一七九五—一八八一。『シラー傳』(一八二五年)、『英雄崇拜論』(一八四六年)、『フリードリッヒ二世の歴史』(一八五八—六五)等の著者。

一〇四、妻へ

私のかはい、者よ

キッシンゲンにて、一八八一、七、二八

今日お前の電報を受取つて安心した、そして私はお前と一しよに、この三十四年間のうちに私たちにあたへられたあらゆる恩恵に對して神に感謝する。神の御慈悲が私たちと私たちの一族をすべて今日まで無事にくらしさせてくださったし、それから、私たちが堅く信じてゐるやうに、今後も私たちをお守りくださるであらうといふことがもうそれだけで特別なことであり、さう誰しにもあたへられるものではない。神のお守り

くださる手がいかに靈妙不可思議に私たち五人の一人々々の上に繰返し／＼かざられたことであらう。私はいろ／＼の心勞や仕事や腹立たしいことも通過して來た。しかし三分の一世紀を回顧すると、私の心臓からは、あらゆる功勞や希望以上に自分は幸福にくらして來たといふ告白と一しよに、深い感謝の念が流れ出て來るのだ。神の恩恵が今後も私たちの上にあらんことを。一八四七年(二人の結婚した年)のあの日はけふよりも暑かつたね。今朝などはわづかに九度、今は十一度なんだ。晝にはヴルレンベルク夫人とシユリエーツァー(外交官)が來てゐて、私たちはバルビーでとれた兎をつぶして食べたのさ。それから私はヘルバートと一しよに鐵道の上にかゝつてゐる橋の方まで馬車で行き、かへりには青いリエーン川を眺めながらアルンスハウゼンまで歩いて來た。治療の方は日に増しきいて來るやうだ。とき／＼痛む日がないことはないが。やはりさういふ痛みがないと病氣は追ひ出すわけには行かないものと見える。とにかく前ほどひどいことはないのだよ。けふなどは痛みはほとんど感じないし、睡眠も食慾もたいへんいい、工合なんだ。私は毎日、いつもより早く床につく(十時半)、けふは九時に

もうラコーチ(鐵泉)を飲んだのぞ。私はお前から来るよい知らせをみるといつもうれ
しいのだ。私たち二人がまたすばらしく丈夫になつて一しよにゐられるやうになつた
ら、どんなによからうね。叔母さん(オイゲニー・フ)やルリー夫人(フオン・シュテユ)にお
前の最も忠實なる
V. B.
よりよろしく傳へておくれ。

一〇五、娘マリーへ

ヴァルチンにて、一八八四、八、一九

私のかはい、娘よ。残念ながらお前の誕生日に對して、わづかに手紙でもつてお祝
ひを申しておく。神がお前やお前の家族をこれまでのやうに恵み深くお守りくださる
やうに。私は四日間ぶつ通してカルノキー(グスタフ・カルノキー。伯爵。)といろく折
衝しきしなければならなかつたが、やつと時間をみつめて、おくれないうやうにお前に祝意
を申しおくるわけなんだよ。誕生日のお祝ひまでに何か差上げたいが、バリドゥスに

頼んでお前にある額がをお渡しするから、ものはお前が自分できめておくれ。こゝでは
何を選んでいゝか、私にやわからないのでね。お前のお母さまはありがたいことには
いくらかよくおなりだよ。胃痛はときくおこるやうだが、しかし體重と體力とは大
分ふえて来た。ランツァウにも小さい連中にもよろしく。私はこゝには残念ながら二
三週以上は滞在できないだらう。樞密顧問官すうみつもんくわんの仕事は自分の大好きなヴァルチンを九
月にはベルリンと、それからせめてフリードリッヒスルーと取りかへるやうに、私を
しひるのさ。フリードリッヒスルーの方だと私はかなりおちつけるのさ。こゝか、ベ
ルリンで對面するまで、さよなら。お前の忠實なるお父さま
V. ビスマルク

一〇六、息子ヴィルヘルムへ

ヴァルチンにて、一八八五、八(七月の書き違ひ)、二九

私の親愛なるビル

十九日のお前の手紙、ありがたう。その手紙で私の子供たちのお母さまに會へるお前の満足を讀み取ることができて、私はよろこんでゐるよ。お前の誕生日にこの感情が、できるだけ曇りなく續くやうに心からお前に願つておく。世の中はいつもお天気とはさまらない、それで人間の幸福の極意はわれ／＼が自分勝手に作る標準では見出されるものぢやないのさ。私には神が祝福の非常に豊かな量をこれまでお授けくださった——私の期待以上に。それでも私は毎日のやうにいろ／＼の小事に對する私の不満を克服して行かなければならぬ。それらの小事も少しよくなつてくれ、ばい、など、思ふのだが、その私の考へは恐らく正當なものぢやないんだらう。神が善い印象に對してより悪い印象に對して一層感受的である、かういふ父の遺産をうけつがぬやう、お前とジビルレ(息子の妻)とお守りくださるやうに。お前のお母さまは御無事ださうだよ。當地ではライ麥の收穫がさかんにやられてゐる。昨日は納屋への運搬が始まつた。今日は天氣がよく、涼しくて爽快だ。私はこの頃すこぶる元氣に栗毛を乗りまはしてゐるよ。たゞ私が彼女ほど早く進まうとしないと、とき／＼私の力以上

に私を弾ねあげるのさ。……今や私はたつた一人になつてぶら／＼くらすやうな時を希望してゐるよ。近隣から押しよせる客もしばらく避けてゐるんだ。たゞカルノキ(前出。オーストロ・ハンガリーの外相)だけに私は八月半ば頃面會する。政治的義務でやらねばならぬこと以外は、私はこぼむつもりだ。マリーはまた運動の散歩をやりだした。もうゼーベルク(山の)の邊までとき／＼行くやうだ。……私はお前に誕生日のお祝ひに輕快な遠乗馬車か、それとも何かほかにお前の望みのものを送つてあげようとおもつてゐる。お前が自分でオッフエンバッハで何か選んだらよからう。ジビルレへくれ／＼もよろしく。神がお前たち兩人をお守りくだされ、丈夫で家へ戻れるやうにしてくださることを。お前の忠實なる父

v. B.

一〇七、妻へ

電報

フリードリッヒスルーにて、一八八六、一二、二二

くれぐれも用心が肝要、全快しないうちは決して旅行に出ぬやうに。クリスマス・トリーは二三日のばす方がよろしからう。シュヴェーニンガー(師)はゐるのか。

V. ビスマルク

一〇八、妻へ

フリードリッヒスルーにて、一八八六、一二、二三、夜

私のかはい、者よ

いろ／＼の障碍と別居がのび／＼になることはほんとにいやなことだが、お前の風邪は、そんなことよりも一層心配だ。私たちのお祭は勝手にのばしてもよろしいが、お前の健康は私たちの自由にはならないよ。私たちのお祭は二三日うちにやるとしよう、それともフランス人のやうに新年にやつてもいい。しかしお前がすつかりよくなるにうち、冬の空気を通してこちらへやつて来ることだけはどうかやめておくれ。お前が病氣になつたら、祝祭のよろこびもいろ／＼なプレゼントも私にとつて何の役

に立たう。お前がさうなつたら、よろこびに代るに不幸がやつて来るのだ。蠟燭(ろうそく)にどんなに火をつけたところで始まらないよ。明日は決してこちらへやつて来ないやうに頼むよ、それから明後日(二十四日)も。今度はとにかく祝祭はやめようぢやないか。決して意地を張つちやいけないよ。お前が病氣になれば、私も一しよに病氣にしてしまふのだよ。とにかくこちらへ来れば、お前は雪にとちこめられてしまふのだ。こちらにはたいへんな雪だよ。まあそのほかはみんな無事、とりわけ私は無事(せきさい)。しかしお前が静かな温かな室にとちこもつてゐることが確かでないよ、お前のことを心配して私は病氣になるにきまつてゐるよ。お前がその通りにするか、どうか、すぐ電報を打つておくれ。さうでないよ、私は落ちつけないのだ。子供たちへよろしく。お前の最も忠實なる

B

一〇九、妻へ

フリードリッヒスルーにて、一八八六、一二、二三

電報

いつになく安眠した。手紙、受取つた。雪はまださかんに降つてゐる。今日はやつて来ないやうに。お前はビルと同じやうにとちこもつてゐるんだね。明日はこゝではまだプレゼントはやらないつもりだよ。

一一〇、學生團ハンノウヴェーラ*

ヴァルチンにて、一八八七、八、一

饗宴委員會より御鄭重なる御招待を頂き、深く感謝いたします。しかし私の健康の回復がまだ思ふやうにはかどりませんので、五十年記念祭に参加できませんのは、私のまことに遺憾とするところであります。私の昔の學生團の仲間や同時代人と再會し、いろいろのなつかしい追憶を新たにすることは、私に大いなるよろこびをあたへてくれたでせうに。しかし私は醫師の忠告に服さねばなりませんので、残念ながらゲオルギア・アウグスタ(ギエツティンゲン大學のこと)と特に學生團ハンノウヴェーラに衷心よりよろこ

ばしい祝祭と幸福なる將來とを祈るだけにとどめるよりほかはないのです。

* ビスマルクの屬してゐたところの、ギエツティンゲン大學の大學生團(コール)の名。

一一一、妻へ

ヴァルチンにて、一八八八、五、二六

電報

馬もゐないし、妻もゐないし、こゝにはもう到底我慢ができない。私たちは明日かへる。

V. ビスマルク

* この年皇帝ヴィルヘルム一世崩じ、新皇帝即位したが、新帝はビスマルクに帝國宰相の役をやめさせた。彼は心中すこぶる平かならず、不満の晩年をすこすやうになつた。その氣持は手紙のはしばしにもうかゞへるのである。

一一二、妻へ

フリードリッヒスルーにて、一八八八、七、一六

私のかはい、者よ

ホムブルクへお前が無事に到着したことは何よりだつた。それでお前に私の健康の確かな證據を與へるために、私は自筆で二三行書くことにした。昨日の晩、私は幾度寝返りしたかしのれないが、その度毎に、私たちはどうしてこんなに散りぐらばらになつてゐるのかと考へずにはゐられなかつたよ。お前はチューリングゲンを夜行で走つてゐる、ヘルバートはアルコーナとボルンホルムの間の海上にゐる(皇帝ヴィルヘルム二世の北方諸港への行幸に)、マリーはベルリン、ビルはハーナウ、私たちはこの森の中にあるといふ風にさ。何故に私たちは一しよになつてゐることはできないのかね？ 旅は大ていの人には一番の楽しみだが、私たちには苦勞の種なんだ。私たちはこれまで毎日二人きりで食事をした。ランゲ(ランゲンベックと)すら食卓にはやつて來なかつた。私は自分の家族のものが家にゐないと、非常に物たりないが、それだけ他人をまじへることが嫌ひなんだ。今朝から大分あつく、太陽も出てゐたのさ。それまでは八乃至十度、それ

から雨。今曉、クノー(アウツ)が狩獵に出たときは(不成功)、三度だつたさうだ。私が九時に起床したときは、十六度だつた。森の眺め、すこぶるよし。畑は馬鈴薯と燕麥を除いては、どこも不出來だ。乾草は雨に打たれて勢ひがないよ。もつと花が大きくなり、大鎌で刈られる前に牧場を飾らなければいけないんだがね。寒いくらゐるんだが、避暑客は大分入り込んでゐる——どんな小さな家にも來てゐるよ。どうもかういふ連中は森をあらして困るんだ。私は終日戸外にゐる——徒歩のときもあり、馬に乗るときもあり、馬車に乗るときもあるが。ベルリンでは毎日一時間ぐらゐるだが、ここでは少くとも六時間は戸外にゐるのさ。こゝだと馬に乗つても、徒歩でもさう早くは疲れないのが妙だよ。仕事といふものは、原則的にやらないことにしてゐる。家にゐるときは、カミン爐のそばで横になりながら、小説を讀んでゐる。それがどうにもやりきれなくなると——

神がお前をお守りくださいされ、お前が丈夫で元氣になつて歸れるやうに、お前を力づけてくださることを。叔母さんたちへよろしく。お前の

v. B.

一一三、息子ヴィルヘルムへ

フリードリッヒスルーにて、一八八八、八、三*

親愛なるビルよ

神の祝福が明日からもこれまでのやうにお前と共にあり、あらゆる病氣をお前やお前の家族から遠ざけられんことを。健康といふものは、——妻子のそれをも含めての——何といつてもこの生活におけるあらゆる愉樂ゆたかの基礎だ。年をとればとるほど、ますますそのことを痛感するね。私などもちやんと眠つたか、十分に消化したかどうかによつて、毎日いろ／＼に變り、空高く歡呼の聲をあげるかと思へば、死ぬほども悲しくなるのだよ(傍點を附した箇所はゲーテの「エグモント」における少女クレールヒエンの歌の二句)。消化の方は大てい私に成功するが、安眠の方はだん／＼できなくなる。兩方がうまく行けば、全體の世界觀が一層樂天的となり、できるだけ長生きしようといふ傾向が力強くなつて來るものだ。さういふわけで私はお前に何よりも健康をすゝめるよ。お前にといふのはむろんお前の家の

三人の女性もふくめてゐるのだがね。末の二人はシュヴェーニンガー(師)によつて將來の健康が保證されたので、私は非常によろこんでゐる。お前が三十六歳になつたことを思ひ浮かべてみると、私はブロッケンハイマー大通(フランクフルト・アム・マインの)に住んでゐた頃の、すなはち一八五二年の八月一日(その日にヴィルヘルムは生れたのである)を思ひ出すのだよ。當時私は今のお前よりは一歳年上であつたが、あの頃は、私が今日雨のそぼ降るザクセンの森にゐて、第三代のドイツ皇帝(皇帝ヴィルヘルム二世はベータースブルク、シュトゥックホルム及びフリードリッヒスルーに滞在された)を自分の家にお待ち受けしようとは夢にも豫想しなかつた。十年後のお前の誕生日には私は南フランスに、多分ビアルリツツにゐたし、それからなほ十年後、すなはち一八七二年(獨佛戰爭以後ドイツは歐洲列強の隨一となつたが、それと同時に國の内外に諸種の大問題がおこつて來た)にはすでに大なる骰子さいが投げられ、外部的情勢——政治的及び個人的の——は、すでにほとんど今日のそれと同様になつたのだ。もつとも今日よりはずつと良好ではあつたが。私はまだ自分の思ふまゝに乘馬もでき、狩獵もでき、飲むことも眠ることもできたし、義務や名譽のうへからなさねばならない仕事はいふまでもなく、まだ幻想げんきやうや野心をも持つ

てゐたのさ。私は生きることや、太陽をみる(二ヶ月以來のやうに雨雲を通して、)もことや、私の官職上の仕事をどうにかやつて行くことに満足してしまふほどまでには行つてゐなかつたのだ。これが人生のなりゆきなんだね。それで私がもし、私のなりゆきが神の恩寵おんちようにしたがつて特に順調に行はれたといふことを認めようとしなければ、思慮分別のない人間と言はれても仕方があるまい。これからの私に残されてゐるものは、おまけなんで、實をいふと私は十二分に満足してしまつたのさ。お前もこれらの三十六年後にやはり同じやうな感情を持つてもらひたいもんだね。皇帝は十時半においでになり、明日の午後六時まで御滞在になられるのだ。この家は卵のやうに充満してゐる、おもによ、そこからやつた従僕(家うち)を入れないで九人)や、お給仕のための官房使丁や料理方や憲兵や警官などで。この森の中の、宿舎になれるやうなわが家だけではとてもたりないのだ——とりわけこの家も避暑客でいっぱいだから。ペーター家やヴェルナー家なんかもさうなんだ。皇帝はあらゆる伺候者をおことわりになつた。人間に會ふことにはすつかり堪能たんのうされて、こゝで御休息遊ばされようといふの

だらう。至極短い御休息だがね。皇帝からは御自分がお着きになつても、私には床についてゐるやうにといふ、ありがたい御おほせを賜はつた。さういふことはしかし、したの人たちの見せしめにもやれるものぢやない。帝王に對する儀禮といふものは公的には自然法則のやうに避けることができないうやうに見えねばならないものだ。さういふことから除外される者は年の行かない子供らと隨從者ずゐじゆうしやとだけなんだ。家門の名譽に關するやうなことは萬々ばんばんないから安心なさいと、お母さまに傳へてほしい。ベットは十八臺だけちやんとしたのがあり、なほそのほかに室をあてがはれない隨員ずゐいんには、新しい屋根裏部屋に幾つかのベットを備へておいた。賄まかひや料理の方にもしかるべく手配はしておいた。若い鷓鴣しやこ、松露しやうろ、鱒ます、鹿の背肉せにく、蝦えび、そのほかいろ／＼。室が何分にもたりないが、これは身分相應なところでやむを得まい。

・ 添書の金額をお前のほしい誕生日のプレゼントに振り向けてもらひたい、ジビル(ヴィルヘ)の妻にくれ／＼もよろしく、接吻もたのむ。お前の忠實なる父 V. B.

* この日附は郵便のスタンプからも、手紙の内容からでも明かであるやうに、一八八八、七、三一の

書き誤りである。

一一四、教授ルードルフ・フォン・イエーリング^{*}へ

ヴァルチンにて、一八八八、八、二一

謹啓

貴下の七十歳の誕生日に對する私の満腔の祝意を御受納あらんことをお願いいたします。この日において貴下は著述家、教授及び愛國者としての、多大なる成功の長い御生涯を矜持^{ほこり}を以て回顧されることができると信するのであります。私にゲオルギア・アウグスタ(一七三七年ゲオルク二世が建設されたギエツテインゲン大學のこと)から授與されたる表彰(法學の名譽ドクトルとしての)によつて、貴下と時を同じうして、私が五十五年以前に大學生として別れを告げたところの大學に再び屬するに至つたことは、私の特によるこびとするところであります。

^{*} 有名なドイツの法學者。一八一八—一八九二。「權利闘争論」等で日本にも有名である。

一一五、娘マリーへ

ベルリンにて、一八八九、一、二〇

私の一番かはい、子よ

たつた今、ランツァウから手紙をもらつた。ヘルバートを通して、お前の病氣が私たちがこゝで想像してゐたよりも大分悪いし、そのうへ二人の小さい人もかはいさうに同様の病氣で悩まされてゐるといふことを聞いたのだ。お互ひに遠く離れてゐるので一層心配も増すわけで、せめてそれからでもまぬかれるために、見舞ひに行きたいのは山々なんだがね。しかし私はこの地に結びつけられて、なか／＼動けないし、ヘルバートも行くことができないのだ。マ、はそのことを話せば、すぐにも見舞ひに行きたいのだからが、しかしマ、その人がまた世話のやける人だからね、今までのところまだこの話は持ち出さないのさ。話したら最後彼女はもう居ても立つてもゐられなくなるだらう。そつちへ見舞ひに行つたにしても手のかゝる人の數をすぐに増すだけ

だらうから。ヘルバート宛てのランツァウの手紙はいやな知らせではあるが、熱の點では大分安心させてくれるやうな知らせだつた。私はさういふ種類の肺炎をこれまで二度、それも非常に重いのをやつたが、とにかくそれを切りぬけることができたといふ経験があるので、そんなことで今度大分樂觀してゐるのだよ。一度は六歳の子供のときに、その次はホーエンドルフにゐた時分にやつたのさ。神様の恩寵で私はその危険をしのぐことができたのだが、そんなわけで、私は神がお前や子供たちを病苦からお救ひくださるだらうといふ確信を持つてゐるんだよ。シュヴェーニンガーが始終みてくれるといふので、私の確信は一層強められるわけさ。神がその相談役に祝福をくだされんことを。マ、も私も私たちの近來の状態としては、悪いよりはよい方さ。とりわけマ、の方は私より工合がよい。旅行や仕事や公務上の心配やらで、私は相變らずよく眠れないんだよ。かはいさうなテューラス(犬の名)の骸は昨夕、カンツラーシュタイクの右手の、市壁のつつきのところへ、お前のおくつた花と彼(ランツァウのこと)のおくつた石蓋でもつて葬つたよ。感覺喪失になつて、だん／＼それがひどくなつたが、昨

朝、私の着衣室のなかを歩いてゐるうちに、ころりと倒れて、蠟燭の光のやうに消えて行つたのだが、それにしても短命な犬だつた。神がお前とお前の子供たちをお守りくだされ、みんなすつかり丈夫になつて私に會へるやうにいのつてゐるよ。お前の忠實なる父

V. B.

一一六、妻へ*

フリードリッヒスルーにて、一八八九、八、二二

私のかはい、者よ

お手紙ありがたう。よい宿がみつかつたさうで何よりだ。別れてゐるといふのは一つの禍のやうなもので、それをお互ひに、こぼして一層悪いものにならない方がよいかもしれないね。私はこゝで、同じやうにさびしがつてゐるロツテンブルク(内閣書記官長)と慰め合つてゐなければならぬのさ。マリーもやがてクノー(マリーの夫、ランツァウ伯)から行つてしまはれるのだ。彼女とクリステイアーン(ランツァウ伯の二男)との誕生日を私たちは昨日、たく

さんの花束と彼女の大好きな泡だつモーゼル葡萄酒でお祝ひしてやつたよ。私は彼女に私の見つけた、めづらしいニールばら(本来はベルギーのニールに産するばら)と、オーへの荒野に美しく咲きほこる草花のなから、私が小要塞のうしろでつみとつて来た大きな花束とを差上げたのさ。クリステイアーンは私が十時を打つてから床についたときに、まだ眠くもならず鉛の兵隊さんを、頭に兜をかぶつたのを彼等の將軍として玩具おもちゃにしてゐたよ。テューラス(前出。犬の名)もかはいさうだつたが、しかし獣醫學校に置いて来なければならなかつたのだ。運搬うんぱんできないくらゐ弱つてゐたし、それにこゝには病氣の犬をどうかしてやる設備も何もないんでね。獣醫の心得てゐるのは馬と牝牛だけなんだよ。どうも未だにあいつのことが心配なのさ。お人よしの無器用な奴だつたが、成長もおそく、まだよく私になつてゐなかつたのだ。櫛かしはの樹の森は今美しい。家の近くにあるのぢやなく、森の少し奥にある山毛櫸ぶなのきは一部分、毛蟲にすつかりやられて、一體に葉が少いよ。シェーナウではよいはうち、まめや大きなゼラデラや馬鈴薯が少くとも一モルゲン(一聯の牛が午前中に耕しうる地積)に九十ツェントナー(一ツェントナは百ポンド)もなつてゐたが、これでみ

ると前年の二倍の収穫があらう。そのほかライ麥の出来はよいが、燕麥、大麥、苜蓿うまこやしはたいへん出来なのさ。そのほかは別にこれと言つて知らせることもないね。丁度風呂から出て来て、これからロットの講演をき、に行くところなんだ。書物机を通りかゝつたついでに私はせめてお前に心からの挨拶を送り、よいお天氣をお願ひし、脚のきかなくなつた栗毛のほかは、みんな無事息災であることを報告しておかう。マーレヒエン(マリー・マイのスター夫人)にどうかよろしく。お前の適當と考へた人たちにすべてよろしく。お前の

V. B.

* これはビスマルクが妻へ送つた手紙の最後のものである。

** 八月二十日附のマリーの手紙には、犬のテューラスが死んだことを報告してゐるが、この手紙(八月二十二日)ではまだ死んだことになつてゐない。恐らく日附は二十二日でも、その前に書かれたものかもしれない。

一一七、息子ヴィルヘルムへ　フリードリッヒスルーにて、一八八九、一二、二三

親愛なるビルよ

お前とお前の三人の御婦人方との祝日に對する私の心からの祝意と共に、私はお前に、一人の大きくなつた知事(ハノーヴァーの知事、ヴィルヘルムのこと)に何を一體全體クリスマスのお祝ひにしたらいものか——もつとも彼をあまり早く葡萄酒とシガーの浪費(らうひ)に誘惑(いざわく)しないやうに——といふ疑問の解答を書き送るよ。裏面を見てごらん。(金額が裏に書いてあるのだらう)私はやはり酒も煙草もやつてゐるのさ——もつともお前がやはり七十五歳になつて喫煙をやめたら、私もやめてしまはうが。お前の兄さんは兩方面における極致(きやくち)には、私と同じぐらゐか、或はむしろもつと早く到達するだらうよ——もつとも私が若い時分にやつたよりは、ずつと病膏盲(かうくわう)に入つてゐるがね。日は短いし、うす暗いので、乗馬も馬車もやれやあしない。それでゐて十時になる前に二時間たつぷりうた、ねをしてしまふんだ。夜になると目をとちるが早いかな、目がさめてしまふんでね。お母さんはベルリンにゐる残つてゐるが、お母さんなみにはまあ——無事といふところ、マリーは暗や

みもかまはずよく徒歩でシェーナウの方へ歩いて行くし、ランツァウは霧を分けていろいろの獸を狩りに行つてゐるよ。お前の奥さんとお嬢さんたちにくれぐれもよろしく。お前の忠實なる父

v. B.

一一八、男爵ヘルマン・フォン・ミットナハト*

ベルリンにて、一八九〇、三、二三

謹啓

私は貴下のいはゆる私の「辭職」に對する鄭重なる御挨拶に對して心よりの感謝を呈します。もつとも私は辭職したのではなく、しかし私の願望に反し、かつ一つの明白なる理由もなく職を免せられたのです。**私は邦家の今後の難局(なんきよく)をあらかじめ見越して一身の保全をはかつたといふやうな疑惑(ぎわく)を受けたくないために、以上のことを申し上げておくのです。私が政局から退いた(しりぞ)からとて、今後フリードリッヒスルーへの路をお



影面の人夫ナンハヨの年晩たち満に愛慈

忘れにならず、その地において同僚ではなくなつた、しかし友人としての私を貴下の御訪問を以てよろこばしてくださることを、私は希望してやみません。敬具。

V. ビスマルク

* 政治家。ビスマルクの友人。

** 略年譜参照。

一一九、妻へ

電報*

十四日の手紙ついた。シュヴェーニンガー(醫師)の。経過順調であつたことは何より。會ひたいのは山々ながら、決して無理をせず、全快のうへにてやつて来るやうに切にたのむ。

V. ビスマルク

* これは妻に宛てた電報の最後のものである。

ヴァルチンにて、一八九二、九、一六

一二〇、妹へ

親愛なるマルレよ

フリードリッヒスルーにて、一八九四、七、九

二三週間前に私は古ほごを片づけてゐるうちに、六十九年（一八六九年代）及び七十年代のお前から来た古い手紙をみつつけ出して、読み返してみた。それを見てみると、私の筆不精だったといふことがはつきりして来て、良心の苛責のやうなものを感じ出したのさ。私はそれを返事未済書翰を入れておく、いつもはからな小箱のなかへ置いて、夜眠れないといつも、明日の朝はせひ私の罪を私に告白しようと決心するのであった。日に増し増長してくるものうさ——精神的及び肉體的の——と私は今日までいたづらに戦つて来た。そして毎日五六度、私の文房具の廻りを大きな弧を描いて歩き廻つたのさ。正に老衰の兆さね！ 私はやつと自分のものにした物書く術も忘れて行くし、インキ壺はだん／＼乾いて行く。私はあらゆる肉體的仕事を、なほそれ以上に

あらゆる精神的仕事を嫌悪するのだ。「労働」ぢやなくつて、仕事(業績)をね……

七月十二日。ヴァルチンへ行くためにトランクにもものを入れる際に、私は前の手紙を読み返してみたが、いろ／＼の障碍しやうがいのために、このイエレミヤ哀歌(舊約全書にある。こゝでは悲しいこととをのべた)に然るべき結末をつけるわけに行かなくなつた。しかし私はこの悲歌ひがを持つて旅に出かけるわけには行かないんだ。うっかりさうしたら、いつまたインキ壺のそばに坐れるかわからないからね。それでも前の断片でもつて、私が悲歎を洩らさうといふ氣持になると、必ず一番先にお前のことを考へるといふことがわかるだらう。ヨハンナのメランコリーも依然いぜんとしてなほらないので、それに私の憂鬱いゆうなどを持つて行つて、一層それを悪化させるわけには行かないと思つてゐる。彼女の生活能力はさもなくとも弱いんだね。それに、ちよつとした心配などですぐ故障をおこすので困るよ。ビルはかはいさうに、今度はまた痛風の發作ほつさで悩まされてゐるといふ知らせを今日よこした。これも心配の種さ。私たちは今晚シェーンハウゼンへ行き、土曜日にはベルリンを通つてシュレーヴェへ行き、そこから馬車でもつてヴァルチンへ行かうと

思つてゐる。そこへつくのは夜中の一時頃だらう。私たちはこの世でもつて、いつまた會へるだらうか。私たちは二人とも孤獨寂寥せきりやうの境涯に深く根をおろしてしまつて、もう旅行したいやうな氣分にもならない。むかしはヴァルチンへ旅立つときには、私はいつも何ともいへずうれしかつた。今日ではヨハンナが一しよに行かなければ、そこへ行く決心もほとんどつかないくらゐさ。今の私としては、たゞ棺の中へ入れかはることのできる住居すまかと寂寥とがほしいだけだ。しかしさしあたり汽車に乗つたら、寂寥なんか樂しむことはできないだらう。

お前の少しく生せいに疲れた、しかし神様には從順な、たつた一人の兄せいのちより。

* ビスマルクの兄ベルンハルトは一八九三年五月七日に歿したので、ビスマルクは自分のことをたつた一人の兄と書いたのである。

私の親愛なるマルレよ

この孤獨の境地において、この世に私にとつて残されてゐる心情的關係について思ひめぐらすときには、お前が私にとつて一番親しい位置にゐるのだ。そんな理由からでも、それ／＼の生活のなりゆきからして、こんな風にお互ひに遠く離れてくらすなければならぬことは、ずるぶん残念なことではないだらうか。私の息子たちとの關係もやはり同様であつて、彼等は成長して一人前になると父の家のかけを離れて、遠いところで獨立の生計を營んでゐるのだ。マリーは私のもとにゐて娘としていろ／＼世話をやいてくれるが、しかし彼女も私には借用物(彼女はツァウ伯爵夫人)みたいなものさ。彼女のほかに感じのいい、樂天的な姪おひめのヘレーネ・キュルツがあるが、彼女は明後日はフリードリッヒスルーの方へ旅立つてしまふのだ。旅は一つの惡魔のやうに私の胸を苦しめてゐる。まづ第一に、旅はヨハンナの追憶から、かつ私たちの最後の共同生活の場所から決定的に分離させるのさ。その次に、私はまだ見しらぬ人たちと交際する覺悟ができてゐないのだね。ところで旅の途中でも、フリードリッヒスルーへ行

つても、私はさういふ交際を避けるわけには行かないのだ。いつそこの地で冬ごもりをするのが、一番いいのかもしれない。しかし私に使はれてゐる者は大てい結婚してしまつて、妻子はみんなあちら(フリードリッヒスルー)にくらしてゐるんだし、それに何分クリスマスも間近に迫つてゐるのでね。シュヴェーニンガー(醫師)と私の息子たちがやはり向うへ行つた方がいゝと主張するのだ。ヒンターヴルトの中の、こんな人里離れたところにあると、何か急變でもあつたときは、急行や夜行で駆けつけなきやならないが、向うにをれば、すぐにやつて來られるといふわけなんだよ。それで私もこゝを立つことにする。いろ／＼の人間の中に立ちまじると、こゝにゐるよりはかへつて一層寂寥を感じることであらう。……私に残つてゐたものはヨハンナであつた、彼女との往來や、彼女の健康を毎日尋ねに行くことや、一しよにくらした四十八年の回顧から出て來る感謝の證示やであつた。ところが今日では一切は荒涼くわうりやうとして空虛くうきよである。さういふ感情はよろしくないが、しかしどうすることもできないのだね。私は民衆が私にあたへてくれた私の功績についての、あれほどの愛と認定(ドイツ國民はビスマルクの勳功に對する感謝として、多くの土

地を彼に)とを忘れてゐるのぢやないかと、私自身を叱らないではゐられない。私は四年間(一八九〇年の退)といふものは、彼女も一しよによるこんでくれたので、そのことに大いなるよろこびを感じてゐたんだ——もつとも、社會の上下にはびこつてゐる私の敵に對する憤慨ふんがいもないわけぢやないがね。今日ではしかし私の内部のこの炭火も燃えつきてしまつた。それはもつとも望むらくは永久にはないであらう——神が私になほ生を恵みたまふならば、しかしこの三週間(ビスマルク夫人は一八九四年十一月二十七日、永眠した)昨日で丁度三週間になるのだが——は秋風落莫しゅうふうらくばくの感情の上はまだ一本の草をも生長せしめてくれなかつたのだ。私の愛する妹よ、こんなに愚痴ぐちをぶちまけることをゆるしてもらひたい——もつともまだすつかりぶちまけたわけぢやないがね。私は私の大きな不幸からこのかた、以前より一層疲れて來た。たまらなく痛む神経痛が日に増しひどくなるし、睡眠や戸外に長くどまつてゐることをさまたげるのだ。消耗せうまうされた神経が……

お前の忠實なる兄

V. B.

一一二一、義弟オスカーへ

フリートドリッヒスルーにて、一八九五、五、一八

親愛なるオスカーへ

私たちもお互ひに年をとつてしまつた。老い先も恐らくさう長くはあるまい。この世をおいとまする前に、もう一度會つて話すことはできないだらうか。私たちが高等學校(ベルリ)でビールの最初の一滴を一しよにくみかはしたのも、もう六十六年か六十七年の昔になつてしまつたね。それは上級第三學級(上から)の教室のそばの階段であつたと思ふ。もう飲むこともできなくなる前に、最後の一滴をくみかはしたいものだね。どうだらう? 私たちはお互ひに年もとり、元氣もなくなり、不機嫌になつてしまつた。しかし私は君の聲をもう一度聽いてみたくて仕方がないのさ——私が……前に。君はしかしベルリンを立つさうで、もう汽車に乗り込むところだらう。なせまたシュテッティン線の代りにハムブルク線を取らなかつたのか? 君の V. ビスマルク

一二三、息子ヴィルヘルムへ フリードリッヒスルーにて、一八九五、七、三〇

親愛なるビルよ。私は心からお前の誕生日をお祝ひする。もう第四十三回目ぢやなからうか。Gott sei daだからね。月日の過ぐるは矢よりも早し。私たちはそれ以來さまざまのことを體驗して來た。なほいろ／＼のよきことが次の四十三年間にお前に授けられんことを。私は平和のうちに無爲の生活をつゞけてゐる。毎日服を着たり、ぬいだりしてね。それで天氣がいゝにもかゝらず戸外に出ると顔面神経痛が大分ひどくなるので困るが、さうでないときとシェーナウのよく實つた畑を通して馬車を走らせたくなならないのだ。醫師の説によると運動不足から來るといふのだが、私の經驗によるとあまり外に出すぎるからだとか考へてゐる。メルク(男爵)は彼の飼犬に對してそれと似たやうなディレンマ(板挟み)におちいつたのさ。彼はあんまりほえ過ぎるので犬を打たうとしたんだがね。私は、犬の方ぢやむしろあんまりほえなさ過ぎるので打たれるのだと考へやあしないかと、彼にダメを押してやつたのさ。私の顔面神経痛の原因についての私のめぢやな判断は、打たれる理由についての犬のめぢやな判断と兄(兄)たりがた

く、弟(弟)たりがたしかね。

今のところ私は室の中につとしてゐるよ。それは大分體にいゝやうだ。しかし長い間にはそれもきかなくならう。といつてお醫者さんたちも長い間にはきかなくなるだらうよ。

ヘルバートは今晩までこゝにゐる。プレッセン(伯爵。ペーター・スプル)一家は昨日までゐたのさ。あの夫人はもう十ポンドも體重がふえればもつと美人になるんだがね。彼はしかしその説を容れないで、むやみに節食してゐるのさ。

……ジビルレと三人の子供さんたちにくれぐれもよろしく。お前の忠實なる父
V. B.

一二四、教授ケンメル博士へ

フリードリッヒスルーにて、一八九六、一〇、二四

肅啓

ドイツ國民の生成過程せいせいこうていに關する貴著並びに圖解世界歴史の新卷、御惠投下けいとうされ、まことにありがたうございます。私はあなたの以前の御著述ごちよじゆつに接したときと同じ興味を以て兩著を拜見いたすつもりです。

早速ながら圖解本の方をざつと眼を通しましたが、歴史上の人物、事蹟及び領域りゆうきよの繪畫的及び製圖的敘述によつて過去の事柄が具體的ぐたいてきにあきらかにされ、感銘が一層しつかりして來るといふ私の以前の印象が再びよみがへつて來たことを申し上げておきたいと存じます。私は史料研究所や博物館におけるこの種の材料の集輯しゅうしふがだん／＼發達し、歴史の討究たうきやうに一層資するやうになつたことをよろこばずにはゐられません。このことは特に地圖について言へることでありまして、紀元五百年及び千五百年の狀勢は閱讀えんどうを通してよりは挿繪によつて私には一層はつきりとわかりました。地圖による實物教授はこの點において言葉と活字とによる教授よりは一層有益であり、印象を與へる點においても一層効果的であると考へます。今や學校において實物教授の方法に一

段と重きをおくやうになつたことをうかゞつて、よろこびにたへないのであります。あなたがヴァルチンに私を御訪問くださつたことを想ひおこして欣快きんくわいにたへず、一筆お禮を申上げた次第です。

* オットー・ケンメル。歴史學者。ライプチツヒ高等學校々長。

一二五、妹へ

フリードリッヒスルーにて、一八九七、一一、一七

親愛なるマルレよ

お手紙拜見、ほんとにありがたう。クリザンダー(音樂學者。ピエ)はお前に私の近頃の状態をあまりに樂觀的に報告したやうだね。私はこの數週間、顔面神經がだん／＼ひどくなつて、大いに閉口してゐるのさ。それに左足のはげしい痛風發作つうふうはつさが非常な苦痛を與へるので、夜もよく眠れないし、ほとんど身動きもできないくらいなんだ。失禮ながら、自分で手紙が書けないので、ランツァウ(前出。娘マ)に代筆をしてもら

つた。

オスカールにくれぐれもよろしく。新年にお前が来てくれるやうなら、どうか一しよにやつて来るやうに傳へてもらひたい。

お前の忠實なる、そしてかなりみじめな兄

V. B.

一二六、皇帝ヴィルヘルム二世へ

フリードリッヒスル！にて、一八九〇、一二、二五

皇帝陛下

國王陛下

陛下の玉座のもとに、私はおそれ多き御思召を以て私に下賜されるクリスマススの御贈物に對して、あへて私の最も恭謙なる感謝を捧げようと存じます。ありがたき御贈物は完成の極に達せる模寫を以て、主として御先代（皇帝ヴィルヘルム一世のこと）に對する私の記憶

を呼びおこすところの、さらに御先代が半世紀以上の長期にわたつておそれ多くも私に聖恩を證示したまひ、崩御の日に至るまでも保持し給うた場所をば私の眼前に髣髴たらしめるのでございます。

過去を偲ばしめるこの御記念品に對する私の最も恭謙なる感謝に結びつけて、私は近づきつゝある改年に對する私の御挨拶をおそれかしくみで申上げたいと存じます。

恐惶謹言。

臣・V. ビスマルク

一二七、教授カール博士へ

フリードリッヒスル！にて、一八九八、一〇

謹啓

皇帝及び國王陛下にはホーゼン市に建設せらるべき國立圖書館の命名として父君皇帝ヴィルヘルム一世の御名稱をお選びになられたことをシュヴェーニンガー教授（エルンガー・シュヴェーニ）を通じて拜承、欣快これにしくものはありません。

私の長く御奉仕申上げた國君の光榮ある御名が、私としても最も熱烈なる同感を捧げてゐるところの愛國的の計畫に大いなる成果と隆昌りゅうしやうとをあたへるであらうことを、私は希望いたします。敬白。

V. ビスマルク

* これはビスマルクの書いた最後の手紙である。ヴィルヘルム・カール博士は教會法及び國法學者。

をばり

オットー・フォン・ビスマルク略年譜

西 曆	日本年號	年 齡	事 項
一八一五	文化十二年	一	<p>四月一日、プロイセン領マークデブルク縣イエリコフ郡の村落シェーンハウゼンに生る。家柄は邊疆國<small>へんきやうこく</small>ブランドンブルクの五百年來の古い貴族で、澤山の領地があつた。</p> <p>父は騎兵大尉フェルディナント・フォン・ビスマルク、母はルイーゼ・ヴィルヘルミーネ。(實家の姓はメンケン)</p> <p>オットー・ビスマルクはこの父母の四番目の子。だが上の三人のうち生きてゐたのはベルンハルト一人だけであつた。オットー・ビスマルクのあとに生れたの</p>

一八三二天保三年
一八三五天保六年

一八
二二

は、フランツ(三歳で歿した。)と妹マルヴィーネの二人であつた。

オットー・ビスマルクは市民の出である母から明敏な頭脳と強烈な野心とを受けつゝいた。初めベルリンの學塾に學び、後にフリードリッヒ・ヴィルヘルム・ギムナージウムに學んだ。

ギエツティンゲン大學(別名ゲオルギア・アウグスタ)に入る。彼が屬した大學生團の名は、ハンノウエーラ。この大學にゐる間に、彼はスピノザ哲學からかなり強い影響を受けたが、一方、生活は「亂暴者のビスマルク」とあだ名されたくらゐ、あらくしく放縱であつて、多くの負債をつくつた。グスタフ・シャルラッハ、(後にハノーヴァー・ミンデンの郡長)伯爵アレキ

一八三六天保七年
一八三八天保九年
一八三九天保十年

二二
二四
二五

サンダー・カイザリング及び米國人ジョン・モトレーらがこの時代の彼の親友であつた。

一八三五年、ベルリン大學に入つて、法律學を學んだ。

ベルリン市裁判所司法官試補となる。

アーヒエン及びポッツダムこの處の司法官試補となる。

一年志願兵として近衛獵騎兵大隊へ入隊。

母死す。(四十九歳)

官吏生活に愛想をつかした結果、官を辭し、所有地の經營に従事するに至つた。經營のかたはら歴史や政治學の研究をおこたなかつたが、その生活は相變らず自制をかき、世間との交際を嫌ひ、物事を疑ふやうな傾向にとらはれがちであつた。バイロンやレーナウ

一八四一天保十二年

二七

の詩を愛讀したのもこの頃のことである。

パンジンに住むオツティイーリエ・フォン・ブットカ
ーマー嬢と婚約を結んだが、兩者の間に意思がうまく
通せず、結局それは間もなく破棄された。

一八四四弘化元年

三〇

十月三十日、妹のマルヴィーネがオスカル・フォ
ン・アルニム・クリエツヒエンドルフと結婚した。

一八四五弘化二年

三一

五月、ルートヴィッヒ・フォン・ゲルラツハ(後に控
訴院長)と知る。

十月、堤防監察官となつた。(エルベ河が毎年雪融け
時分になると氾濫したので、當時かういふ官職が必要
だつたのである。)

十一月二十二日、父死す。(七十四歳)代々の領地(彼
はクニープホーフの土地を後に他人に賃貸した。)彼の

一八四六弘化三年

三二

所有に歸す。

七月、友人モリーリツツ・フォン・ブランケンブルク
と、その最初の妻マリー(その後いくばくもなく死ん
だ。)及び彼等の女友ヨハンナ・フォン・ブットカーマ
ー(後部ボンメルンの生れ)と共に、ハルツ山へ旅行し
た。(彼はその前にもヨハンナに會つたことはあるが、
このときはじめて彼女をよく知つたのである。)

ヨハンナに求婚した。いろ／＼な曲折をみたが、一
月十二日、ラインフェルトの彼女の家に彼女を訪れ、
遂に彼女からいひなづけたるの承諾を得た。

敬虔にして心やさしき婦人ヨハンナに對する愛と共に、彼の生活は大きな轉回を示して、たいへんまじめ
になつたが、その態度は一生の間つゞいた。

一八四七弘化四年

三三

一八四八嘉永元年	三四
一八四九嘉永二年	三五
一八五〇嘉永三年	三六
一八五一嘉永四年	三七
一八五二嘉永五年	三八

七月二十八日、ヨハンナと結婚した。彼女は當時二十四歳(ドイツ流では二十三歳)であつた。

聯合地方議會の議員に選出せられた。

八月二十一日、長女マリー生る。

三月革命が起つて國內は大分やかましくなつた。

プロイセンの下院議員に選出された。

十二月二十八日、長男ヘルバート生る。

エルフルトの合同議會の議員となる。この頃よりして、プロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世の信任を博するに至つた。

八月十八日、聯邦議會への派遣使に任せられた。一八五九年まで繼續。

八月一日、二男ヴィルヘルム(愛稱ビル)生る。

一八五九安政六年	四五
一八六二文久二年	四八

三月五日、ロシヤ大使としてペーターズブルク駐割を命じられた。(新攝政ヴィルヘルム親王——後のプロイセン國王・ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世——は初めはビスマルクの政策をよろこばなかつたので、いはゞ敬遠の意味で彼をロシヤへ派遣したのである。)

五月二十四日、フランス大使としてバリ駐割を命ぜられた。

九月二十二日、プロイセンの首相に任じられた。(攝政ヴィルヘルム親王は多難の時局に當つていろ／＼政策を立て、みたが、すべて功を奏せず、遂にビスマルクをバリより召還したのである。)

十月八日、プロイセン國外務卿兼任。(當時、彼の政策は世間からむしろ憎まれてゐた。彼は軍備を擴張

一八六三	文久三年	四九
一八六四	元治元年	五〇
一八六五	慶應元年	五一
一八六六	慶應二年	五二

すべく、下院の反対を押しきつて税金を高めたため、議會は猛烈に彼を攻撃した。これに對して彼は毅然たる態度を以て臨み、時代の大問題は討論と多數決によつて決せられるものではなく、血と鐵とによつて決せられるのであるといふ有名な熱辯をふるつた。鐵血宰相の名はこの演説からおこつたのである。

彼一流の巧妙な外交術によつて、ロシアがドイツに對して好意的態度をとるやうにしむけた。

第二次シユレスヴィツヒ・ホルシュタイン戦争。

九月十六日、條約を締結した功によつて、世襲伯爵に叙せられた。

四月八日、プロイセンとイタリーとの同盟を締結した。

五月七日、オーストリアとの鬭争をのばしてゐるといふ理由のもとに不信任を受け、彼はフェルディナント・プロントから暗殺されんとした。
普墺戦争はじまる。ビスマルクは強大になつたプロイセンを北ドイツ聯盟の盟主とした。

七月十四日、北ドイツ聯盟の首相に任せられた。

七月十九日、プロイセンとフランスとの間に戦争がはじまり、國王に従つて従軍した。この戦争の間にビスマルクは南ドイツを北ドイツ聯盟に加入させた。この功によつて彼は後に四十萬ターラーの名譽表彰金を受け、それによつて土地を買ひ取つた——かくしてドイツ國統一の基礎を確立した。

八月十七日、メッツの戦において長男ヘルバート負

一八六七	慶應三年	五三
一八七〇	明治三年	五六

一八七二明治四年 五七

傷す。

パリ包圍中、一月十八日、ヴェルサイユ宮殿でヴィルヘルム一世のドイツ皇帝としての戴冠式が行はれ、ビスマルクは新帝國の帝國宰相として、新皇帝のドイツ國民に對するメッセージを読みあげた。こゝに初めてドイツ帝國建設の偉業がなすとげられたのである。一月二十八日、パリは遂に二十一日間の停戦を乞ふに至つた。

三月一日、一萬のドイツ軍、パリに入城。

三月一日及び五月十日、最後の媾和條約が締結されて、ドイツ帝國はエルザス・ロートリンゲンの領土と五十億フランの賠償金とをフランスから取ることになつた。(この戦争においてドイツ側の戦死者四萬、フラ

一八七二明治五年 五八

戦後直ちに國民皆兵の制度を實施したり、帝國艦隊を編成したりして、あらゆる方面にわたつて大改革を行つた。

文化闘争の開始。(プロイセンにおける國家と舊教會との闘争)

三月十三日、この闘争のためにビスマルクは桶屋職人クルマンから暗殺されんとした。

健康回復のために、一時プロイセン首相の役を軍務

一八七三明治六年 五九

一八七六明治九年	六二
一八七八明治十一年	六四
一八八〇明治十三年	六六
一八八七明治二十年	七三
一八八八明治廿一年	七四

卿ローンに委任した。

プロイセンの上院議員に任せられた。

ビスマルクの發案で、バルカン問題に關する列強會議がベルリンで開催された。

獨逸同盟を成立させた。

プロイセン國の商工相となる。

文化闘争、正式に終結。(プロイセンと法王十三世との間の交渉の結果)

三月九日、皇帝ヴィルヘルム一世崩じ、六月十五日、その繼嗣フリードリッヒ三世相次いで崩じ、その繼嗣ヴィルヘルム二世、皇位を繼承した。(時に二十九歳)

新皇帝は聰明にして實行力に富み、野心満々たる人物であつたため、ビスマルクのやうな不世出の政治家

一八九〇明治廿三年	七六
一八九一明治廿四年	七七

の存在をよろこばず、彼の意見を用ひることをいさぎよしとしなかつた。

三月十八日、皇帝ヴィルヘルム二世は社會主義彈壓法の撤回を命じ、ビスマルクを辭職させ、同時に彼をラウエンブルク太公に叙し、騎兵團の元帥の稱號をたまはつたが、彼は心中すこぶる平かならず、フリードリッヒスルールの山莊に退いて、不平と病苦(特に顔面神經痛)のさびしい晩年を送り、とき／＼「ハンブルク新報」に寄稿して、新時代の政策を攻撃し、わづかに鬱憤をもらすに過ぎなかつた。世人は彼のことを「ザクセンの森の老翁」と稱した。

帝國議會の議員に選出せられたが、彼は一度も出席しなかつた。

一八九四明治廿七年

八〇

皇帝との和解成立したが、それはうはべだけのものに過ぎなかつた。

十一月二十七日、ヨハンナ夫人ヴァルチンにて永眠す。

一八九八明治卅一年

八四

七月三十日、フリードリッヒスルーにて永眠す。皇帝は彼の遺骸をベルリンの本山の王侯墓塋に葬るべきことを提案したが、遺言に従つてフリードリッヒスルーにおいて埋葬されることゝなつた。

昭和十五年十一月二十一日印刷
昭和十五年十一月二十五日發行



不許複製

世界名作家文庫

紙手のクルマスビ

定價一圓五十錢

譯者 吹田順助

發行者 中村豊彦

印刷者 山田三郎太

印刷所 東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

發行所 主婦之友社

東京市神田區駿河台
電話(25) 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 3487 3488
振替東京一八〇番

本社出版物中、萬一不良な品(落丁、亂丁等)がありました場合は、お取替へいたしますから、お買求めの書店か本社へ早速お申出てください。

世界名作家

家庭文庫

刊毎月二行册

『世界名作家家庭文庫』に寄す

石坂洋次郎

今度主婦之友社から出る『世界名作家家庭文庫』は、名實共に日本一の家庭雑誌『主婦之友』を發行してゐる同社が、多年の経験に基いて、趣味、實益、修養の三方面から内外古今の名作を選擇したもので、私はこの『文庫』が廣く各家庭に迎へ入れられることを希望してゐるものだ。

パーネット女史作・伊藤 整譯

小公女

定價一圓五十錢
送料十錢



『ビスマルクの手紙』と同時配本!!

『小公子』とともに、『小公女』ほど日本の讀者に親しまれた讀物はな
い。どんな境遇にあつても、夢と希望を忘れぬサアラ——この一少女のために、幾人の人が清い涙をしぼつたであらうか。しかし、わたしたちは、まだほんとの『小公女』を知らなかつたのだ。今まで譯されたもので、完全譯と言へるものはなかつたからだ。今、こゝに日本最初の完全譯ができあがつた。ぜひ、一讀あれ!

〔刊既〕
國旗掲揚式

定價一圓三十錢
送料十錢

ファンチュリ作・柏熊達生譯
フアシスト黨少年讀物コンクール受賞作品。駐日イタリヤ大使閣下御推薦。同盟國イタリヤの少年少女がいかにかにムツソリーニに捧げてゐるかを描きつくした朗明小説。
トルストイ作・中村白葉譯編

〔刊既〕
兄弟輕騎兵

定價一圓五十錢
送料十錢

世紀の大文豪トルストイが、戦争と平和の中に、いみじくも書き上げた二人の愛國少年、ニコライ、ペーチャ兄弟の活躍を新たに譯出した大愛國小説。

〔告 録 刊 近〕

- 平野威馬雄譯 昆虫のフアブルの生涯 (上)(下)各一・三〇
- サルトン作 バンビの歌 一・五〇
- 菊池重三郎譯 森村 豊譯 ビーターバンと一少女 一・五〇
- 茅野センバツハ作 育兒院の子供たち 一・五〇

東京・神田・駿河台 主婦之友社
振替東京一八〇番

409
276

終

